

新しいクリス チャンたちへ

By Bryan Johnson



新しいクリスチャン たちへ

Bryan Johnson

今この冊子を手に取り信仰における様々な疑問に対する答えを求めているあなたへ

謝辞：

著者は、次のグループによる調査への支援と質問の提示に感謝いたします。

-シンガポールの Living Word Limited 社のスタッフと聖書通信教育コースの学生たち

-オークランドのニューカベナント・インターナショナルバイブルカレッジおよびそのエクステンション・スタディーコースの学生たち

-オークランド・バプテストタバナクル教会に拠点を置くキーウィインターナショナル・フレンドシップグループに参加する留学生たち

翻訳者：

翻訳者の大森ドーソン彩子氏と土居昭氏に感謝いたします。

AUTHOR; BRYAN ASHLEY JOHNSON All rights reserved. The Asia Pacific Discipleship Trust - NZ Charities Reg. No. CC28265

Previously published since 1979 in English and in 2019 in Chinese

参照した他の聖書翻訳は以下のとおりです。

質問 1 から 25 まで、新改訳聖書(第 3 版)、質問 26 から 92 まで、リビングバイブル。

Answers to new Christians' questions / Bryan Ashley Johnson. 1st Edition in Japanese. Translation by Ps Akira Doi San and editing by Masaru Hashimoto San

Includes index. (新しいクリスチャンたちへ)

ISBN 978-0-473-53377-9

1. Bible—Miscellanea.(聖書雑記) 2. Christian life—Miscellanea. (クリスチャン生活雑記) I. Asia Pacific Discipleship Trust (アジア太平洋キリスト教信奉者トラスト) II. Title. (題名) 248.4—dc 22

新しい信仰の友へ、

イエス・キリストを救い主として受け入れる—それは信仰による決断です。私たちは人生に対する疑問にすべて答えられるわけではあ

りません。もし、あなたが「自分の持っている疑問がすべて解決するまでイエスを受け入れることはできない・・・。」と思っているのであれば、イエスにあって救われるという、この世界で最も尊くかけがえのない喜びを味わうことなく、生涯を終えてしまうかもしれません。

神様との平安は知識や教育で得られるものではありません。ただ、私たちが救済するためにこの世に来られ、救いの道を確認して下さったイエス・キリストを通してのみ得られるものです。神様からの無償の愛と救いのプレゼントを信仰をもって受け入れる。ただそれだけで得られるものなのです。

しかし、「信仰」ということばの陰に隠れ、私たちが理性をなくし、神のことばや真実に対し無知であることを神は望んでおられません。第1ペテロ3章15節にはこう書かれています。

「心を動揺させないで、ただ主キリストを信じなさい。もしだれかに、『なぜキリストを信じるのか』と尋ねられたら、いつでもその理由を話せるようにしておきなさい。ただし、おだやかに、真摯な態度で説明すべきです」

この小冊子は新しく信仰をもったばかりのクリスチャン、そしてあなたの身近にいる求道中の友の助けになればとの願いをもって執筆されました。ただし、知識が豊富で、ありとあらゆる疑問の答えを持っている人が、必ずしもイエスの救いを本当に受け入れ、永遠のいのちを得ているとは限りません。どんな時でも、イエス・キリストがあなたにしてくださったことを心に刻み、あなたはキリストの生きた証し人として遣わされていることを忘れないでください。

あなた自身の祈りと聖書の御言葉—この小冊子を最大限に活用するためにはこの二つを欠かすことはできません。神の聖なる霊、聖霊があなたを導き、聖書のことばと神の真理に対する理解を深めてくださるよう、祈りつつ学んでください。

信仰を分かち合う機会がいつ訪れるか私たちにはわかりません。あなたの聖書のあいだにこの冊子を挟んで、持ち歩くのもよいでしょう。もし聖書をもっていないのであれば、スマートフォンでインターネット検索（もしくは聖書アプリ）を利用することもできます。聖書こそ、人類の歴史上存在するどの書物より偉大で、多くの人々に読み継がれている権威あることば、宝物なのです。また、冊子の最後には疑問のタイトルごとに編集された索引が編入されています。

最後の2ページにはあなたが友をキリストに導く際、救いの手引きに役立つ重要な聖書箇所がまとめられています。これらのページを参考にしつつ実際に聖書のことばを用いて証しができることを、お祈りしています。

救い主、主なるイエス・キリストとの親しい友情と、素晴らしい恵みがあなたにありますように。

「神は人の心に働きかけて、従おうとする思いを起こさせ、神が望まれる行いができるように助けてくださるのです」（ピリピ2章13節）

「私は今、ほかのことはいっさい考えず、ただこのことだけを求めています。つまり、真にキリストを知ること、キリストを復活させた力を、この身をもって体験すること、そして、キリストと共に苦しみ、また死ぬとはどういうことかを知ることです」（ピリピ3章10節）。

神の溢れる愛にあって、

ブライアン・A・ジョンソン Bryan A Johnson.

Aーはじまり

1. 地球はどのように誕生したのですか？
2. では、なぜ神は人間を造ったのですか？人間は問題ばかり引き起こしているのに！
3. 神が全知全能なら、なぜアダムとイブが罪を犯さないように造らなかったのですか？
4. 最初人間が罪を犯したからって、人類すべて有罪なんて不公平ではありませんか？

Bー救いとクリスチャンになることについて

5. どうしたら自分がクリスチャンだと分かるのですか？
6. イエスを信じてても親や家族に秘密にしておくことはできますか？
7. どうしてキリストが本当にわたしたちを受け入れてくださったと知ることができるのですか？
8. 1度イエスを信じてクリスチャンになった後でも、別の宗教に移ることはできまするのですか？
9. 私たちが罪を告白したらイエスが私たちを赦してくれると、どうしてわかるのですか？
10. クリスチャンではない友人との関係はどうなるのでしょうか？彼らにどう思われるか、どんなことを言われるか心配です。

Cークリスチャンとしての生活

11. 新しく信仰を持ったばかりのクリスチャンが成長するために必要なステップは？
12. クリスチャンとして水による洗礼は必要ですか？
13. 洗礼を受ける際、完全に水の下に沈まないといけないのですか？
14. ヨルダン川で水の洗礼を受けたイエスは聖霊によっても洗礼を受けました。クリスチャンとして自分もこのような体験をすることができるのでしょうか？
15. 聖霊のバプテスマ（御霊による洗礼）とは？
16. 祈りとは何ですか？必要なのですか？
17. どうしたら私の祈りが聞かれたとわかりますか？神は私の祈ったことすべてにこたえてくださるのですか？
18. 「霊において祈る」とはどういうことですか？（第1コリント14章15節、エペソ6章18節）
19. 聖書を読む意義はなんなののでしょうか？
20. 教会って何ですか？本当の教会とはどのような教会ですか？
21. どうしてキリスト教にはこんなにたくさんの教派があるのですか？
22. （継続的に）礼拝に出席することは大切ですか？
23. クリスチャンなら正式に教会の会員になるべきですか？
24. どの教会に自分が得た収入の十分の一の献金をするべきですか？
25. 「安息日を聖とせよ（守る）」とはどういうことですか？
26. クリスチャンはお酒や薬物を摂取してもいいのですか？
27. クリスチャンは煙草を吸ってもいいですか？
28. 世俗的な娯楽施設やイベントにクリスチャンとして遊びに行ってもいいのでしょうか？
29. もし新しいクリスチャンが間違いを犯したらどうなるのですか？
30. 信仰から離れてしまったり、つまずいて、道をそれてしまったクリスチャンをどう助けたいですか？
31. もしクリスチャンが落胆し、うつ状態になってしまったらどうしたらいいのでしょうか？
32. 「聖化」とは何ですか？

D 一ゆるがない信仰の土台

33. 「救いの信仰」とは何ですか？
34. どうしたら強い信仰をもつことができますか？
35. どうしたら信仰において成長できますか？
36. 死んだ信仰とはどういうことですか？
37. 信仰と奇跡にはどんな関係がありますか？
38. どうして信仰は神を喜ばせるのですか？
39. なぜクリスチャンは断食をするのですか？

E 一神のご性質に近づき、成長する。

40. イエスについてまわった「群衆」と「弟子」の違いは何ですか？
41. クリスチャンとして敬虔であることが重要なのはなぜですか？

42. どうしたら「誠実」（高潔）な人になれますか？
43. どのようにして教会の「執事（牧師を補佐する信徒）」は任命されるのですか？
44. 牧師や長老になるために必要な資格は何ですか？

F 一神の御国とは？

45. どうやって神の御国に入るのですか？
46. 神の御国を見ることはできますか？
47. 神の御国が存在する証拠は何ですか？
48. 福音を宣べ伝えることと、神の国を宣べ伝えることの違いは何ですか？

G 一政府や権力

49. 神の御国は国家や政府にとって代わるものですか？
50. 政府や法律に従わなければいけませんか？
51. クリスマンとして権威を敬うべきでしょうか？
52. イエスの教えには過激なものが沢山あります。私たちは社会に対して反抗的な（反社会的な？）態度で生きていくべきですか？
53. デモクラシー（民主主義）はクリスマン的な政治ですか？

H 一多文化社会について

54. クリスマンになったので、私の民族的・文化的な帰属意識は失われてしまうのですか？
55. なぜ神はこれほどにも沢山の人種（民族）を造られたのですか？
56. イエスはユダヤ人の神で、私（日本人）には関係ないではありませんか？

I 一神

57. 神が人間を造ったのなら、神を造ったのはだれですか？
58. 人はそれぞれ違った神々を信仰したり、しなかったり、なぜ世界にはいろいろな「神」と「信仰」が溢れているのですか？
59. 神が全世界を造られて、全能のお方なら、なぜ今すぐにでもサタンを滅ぼして完璧な世界を取り戻さないのですか？
60. 神が存在することをどうして知ることができるのですか？
61. 神は愛であり、全能なお方なら、なぜイエスを十字架の上で死なせなければならなかったのですか？
62. 聖霊とは何ですか？
63. 「三位一体」（トリニティ）とは何ですか？
64. なぜ聖書は神を「父」と呼ぶのですか？
65. 神は私の必要を満たしてくれるのですか？
66. どの宗教も根本的なところは同じだと思のですが、私は正しいですか？
67. どの宗教を信じようが「信仰」することが重要なことから、宗教は関係ないと思のですが、私は正しいですか？

68. 昔から毎日の習慣としてお祈りをする時間を持っていましたが、クリスチャンとしてその習慣は続けるべきですか？
69. 聖書箇所を暗記して引用しつつ祈るべきでしょうか？
70. 仏教、イスラム教、ヒンズー教の人も天国にいますか？

J ー偉大な人物や他の宗教

71. 歴史上の偉大な人物たちが残した知恵や明言を聖書のように学び覚えるべきでしょうか？
72. 偶像に供えた後で取りおろしてきた食べ物をいただいたら、私たちはそれを食べるべきでしょうか？
73. クリスチャンは先祖を礼拝するべきでしょうか？

K ー死、天国、永遠のいのち

74. クリスチャンは死んだらすぐ天国に行くのでしょうか？
75. ある人がキリストを救い主として受け入れることなく死んだ場合、その人にはもう一度さばきを免れる機会はあるのでしょうか？

L. キリストの再臨

76. 大患難時代に人々は救いを見出すのでしょうか？
77. ヨハネはどのようにして、黙示録に書いてあるような幻（ビジョン）を得ることができたのでしょうか？
78. キリストの再臨は本当にあるのでしょうか？

M. 聖書ー神のことば

79. 聖書が間違いないとどう証明できるのですか？
80. 聖書は人間が書いたものではないのですか？
81. 聖書に記されている歴史的史実は信頼できるものなのですか？
82. どうしたら聖書を理解できますか？
83. 聖書の原語から日本語に翻訳される際に内容や言葉の意味が変わってしまったり、または訳者により意図的に操作されているではありませんか？

N. 未来について

84. ある人たちはどうしてこれから起こることを予言できるのでしょうか？

O. 聖書は結婚についてどのように教えていますか？

85. どうしてクリスチャンはセックスは結婚後のみするようにと主張するのですか？
86. 結婚する前に性的に相性が良いか確かめるため、セックスを試みるべきではないでしょうか？
87. 不自然な性関係とは何ですか？
88. そもそも人はなぜ結婚するのですか？
89. イエスは結婚と離婚についてどんなことを教えましたか？
90. 人工妊娠中絶をしても良いのでしょうか？

P. 未だに理解できないことがあります、どう対処すればよいのでしょうか？

91. 自分に未だ理解できないことがあるとしたら、どうしたらいいのでしょうか？

Q. クリスチャンの素晴らしい目標

92. クリスチャンの目標とはどんなものですか？

A- はじまり

1. 地球はどのように誕生したのですか？

「初めに、神が天と地を創造された」（創世記 1 章 1 節）。聖書の一番はじめの書、創世記には地球の誕生にまつわる記述が収められています。

すべては神の「ことば」によって造られたと聖書は教えてくれます。神の「ことば」のゆえに地球が存在するようになったのです。新約聖書へブル人への手紙 1 章 3 節には「信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです」と書いてあります。

神は「ことば」によって命じることで、何もなく漠然としたところから、物質や物体を生み出す力を持っています。「世界とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた」（詩編 2 4 章 1 - 2 節）

2. では、なぜ神は人間を造ったのですか？人間は問題ばかり引き起こしているではありませんか！

旧約聖書、創世記の 1 章 2 6 節にはこう書かれています。「『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。』神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。『生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。』」。神は人々が愛をもって地上の生き物や環

境を守り、治める、地球の良き管理者となるように、そして子孫を増やし繁栄するように「人」を創造されたのです。

それだけではありません。神はご自身の栄光をあらわすため（イザヤ書43章7節）、そして、ご自身の喜びのために（黙示録4章11節）人を創造されました。神が造られたもので無意味なものなど何もないのです（イザヤ45章18節）。

世界に問題があふれているのは神のせいではありません。全能であり、すべての知恵と善きものの源であられる神を無視して、人は自分で善と悪を見分けることを望みました。その神に対する反抗の罪により、人と神との関係に亀裂が生じたのです（創世記2章を読みましょう）。いのちの源である神から迷い離れた人間は、自分たちが造られた本来の目的を果たすことができなくなってしまったのです。その罪の結果であり代償は「死」です。（ローマ6章23節）。

しかし、神はこの状態をよしとはされませんでした。ご自身と人間との間に生まれてしまった問題の解決方法を提供されたのです。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさばかれている」（ヨハネ3章16節）。

教会（神を信じるクリスチャンたちの集い）には神が人間と神との間の罪の問題を取り除く道を備えて下さったというすばらしい知らせである「福音」を世界中に伝えるという特権が与えられているのです（マタイ28章19-20節）。

3. 神が全知全能なら、なぜアダムとイブが罪を犯さないように造らなかったのですか？

アダムとイブが罪を選択する自由を与えられたからと言って、神の全知性(すべてを知っていること)を疑うのは適切ではありません。神は人間をご自身に似せて造られたと創世記1章26節に書かれているように、神は人間に自ら考え、論理づけ、選択する能力を与えて下さったのです。これらの能力は本来神様のものでした。

もし、人間に選択する能力が与えられていなかったらどうでしょうか。制限に縛られている機械のような存在となっていたことでしょうか。もし、人間に自由意志を用いて選択する能力が無いのなら、自らの意志を持って彼らの造り主である神に対し、愛と崇拝の念をあらわすことも不可能です。それでは神が人類をお創りになった目的を満たすこともできません。

それゆえ、今世界に入ってしまった罪とその結果は、罪を犯すことを選んだ人間の責任です。人が自由意志のもとで犯した罪の責任を、神のデザインミスであったと非難するのはつじつまが合いません。私たち人間が苦しんでいるのは自らの反抗の結果なのです（ロ

一マ7章19-20節)。しかし、私たちとは違い、神は決して罪を犯すことはありません。神は完全なる誠実さ、高潔さ、神聖さを持っておられる方だからです。

4. 最初の人間が罪を犯したからって、人類すべて有罪なんて不公平ではありませんか？

神のご計画は人間を祝福することでした（創世記1章28節）。しかし、サタン（悪魔、神に敵対する存在）は常に人間を罪に誘い、呪う機会を狙っていました。罪は反抗であり、罪は人間に呪いをもたらしめます（ローマ6章23節）。最初の人、アダムはサタンの誘惑にのってしまい、神の命令に逆らう罪を犯しました。そして、地は呪われ、アダムの心は生まれて初めて罪を知り、その結果を目の当たりにすることになりました（創世記3章17節）。この神への反抗という罪によって心に悪が入り込み、その心からでる悪がまた人を傷つけ、穢しました（マタイ15章18-19節）。そのように、罪が人の存在そのものの中に入り込んでしまったため、その子孫に命が受け継がれていくと同時に、反抗心にあふれる悪い心も引き継がれてゆく宿命となってしまったのです。ある果物の木が突然全く別の果実を実らせることができないのと同じで、罪の性質を持った人間から生まれるのは同じく罪の性質を持ったこどもです。

神は罪の呪いの支配下に置かれて苦しむ人間をご覧になり、憐れんでくださいました。そして、罪の呪いから解放する道を備えられたのです。それが主、イエス・キリストです。イエスは地上に来られた神のひとり子で、人として地上で歩まれた人生において一切罪を犯しませんでした。全く罪がないお方が、死ぬべき私たちの身代わりとなり十字架の上で犠牲の死を背負われたのです。

だれでも自らの罪を告白し、イエスが成し遂げて下さった救いの奇跡を信じる者には、イエスが新しい心と生き方を与えてくださいます。また、イエスを受け入れた心には神の聖い霊、聖霊が住まわってくださいます。「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです」（ローマ8章9節）。これこそが人間の罪の呪いに対し、神が用意された解決策なのです。

B-救いとクリスチャンになることについて

5. どうしたら自分がクリスチャンだと分かるのですか？

クリスチャンとはイエス・キリストを信じて救いを受け取った人のことを指します。救いは信仰によってもたらされ、信仰は神のことばを聞き、学ぶことによって与えられるのです。

ローマ人への手紙10章6-10節にはこう書かれています。「信仰による義はこう言います。『あなたは心の中で、誰が天に昇るだろうか、と断言してはいけません。』それはキリストを引き下ろすことです。また、『だれが地の奥底に下るだろうか、と断言してはいけません。』それはキリストを死者の中から引き上げることです。では、どう断言していますか。『みことばはあなたの近くにある。あなたの

口にあり、あなたの心にある。』なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」。

本来人間が持っているべき神への信仰は、私たちの罪によって失われてしまいました。しかし、その罪を素直に認め告白することにより、誠実で公正な方であるイエスは私たちを赦し、私たちの間違った行動や態度—私たちの不義—から、清めて下さるのです（1ヨハネ1章9節）。

聖書はまた、クリスチャン同士がお互いに対していただく深い兄弟愛も、その人が地獄の裁きから救われ、永遠のいのちを与えられたしるしであると教えてくれます。

「信仰をなくして私たちは神に喜ばれることはできません。なぜなら、神に近づく者は、神がおられることと、そして、真剣に神を探し求めるものには必ず報いて下さる方であると信じなければならぬからです」（ヘブル11章6節）。

イエス・キリストを救い主と信じ、罪を告白し、反抗的な生き方から神の道に立ち返っていますか？そうならば、あなたは間違いなく信仰をもった人、キリストに従うもの、つまりクリスチャンです。神に信頼して生活し、同じ信仰をもつ他のクリスチャンたちとお互いに愛し、信頼し合う神の家族の一員となることができるのです。

6. イエスを信じても親や家族に秘密にしておくことはできますか？

信仰によって、イエス・キリストが私たちの救い主であると受け入れる。それは、私たちの人生すべての分野に大きな変化をもたらす出来事です。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」（2コリント5章17節）。その信仰と聖霊の働きにより、あなたは日々キリストにあって変えられ、成長してゆきます。それでもなお、自分の信仰を親や家族に隠しておくことはとても難しいでしょう。そんなことをすれば、あなたの人生にもたらされたすばらしいキリストの救いの力を否定することになりかねません。「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」（ローマ人への手紙10章10節）。

イエスは私たちが信仰の証し人となるように命じられました（使徒行伝1章8節）。「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい」（1ペテロ3章15節）。

イエス・キリストこそが私たちの救いであり、永遠のいのちへの希望だということを親や家族に伝える思いと、そのための愛と勇気を与えてくださるよう神に祈りましょう。

7. どうしてキリストが本当にわたしたちを受け入れてくださったと知ることができるのですか？

エペソ人への手紙2章13節はこう言っています。「しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近いものとされたのです」。

イエス・キリストはあなたの罪の代償としてご自身の血を流し、命を差し出されました。あなたを罪の支配から買い戻されたのです。あなたのためにそれほどまでの犠牲を払ってくださった方が、そのあと心変わりをして、あなたを拒絶するようなことがあるのでしょうか？そんなことはありません！「神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられました。それは、神がその愛する方であって私たちに与えて下さった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです」（エペソ1章5-6節）。

また、イエスは地上での使命を果たされる前に、将来宣教のこぼれを通してイエスを信じ、クリスチャンになる人々のために祈りをささげられました（ヨハネ17章20-24節）。この祈りの中にイエスの私たちに対する愛と誠実さが記されています。

8. 一度イエスを信じてクリスチャンになった後でも、別の宗教に移ることはできますか？

クリスチャンになることによって、物事を判断したり、何かを選択したりする能力がなくなってしまうわけではありません。毎夕、神とエデンの園を散歩し会話をしていたアダムでさえ、神に反抗する選択をして罪を犯しました。

イエスは「天の御国は、良い真珠を探している商人のようなものです、すばらしい値うちの真珠を一つ見つけたものは、持物を全部売り払ってそれを買ってしまいます」とたとえられました（マタイ13章44-46節）。クリスチャンとはこの真珠の商人のようなものです。一度クリスチャンとして生きる喜びを知り、イエス・キリスト以外に救いと永遠のいのちへの道はない（ヨハネ14章6節）と確信したのなら、その人は自分の人生すべてをイエス・キリストにささげ、彼についてゆきたいと願うはずです。そんな経験をした後に、今さら別の神や宗教に仕えたいとは思わなくなるでしょう。なぜなら、イエスのほかだれも、そしてどんな宗教も、本当の意味で人の心を満たすことはできないからです。

さらに、神は「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」（出エジプト20章3節）と命じられました。クリスチャンになったあと、別の宗教に移ってってしまう人は、真実を見失ってしまっている人です。そのような人のために私たちは断食をして祈るべきです。

9. 私たちが罪を告白したらイエスが私たちを赦してくれると、どうしてわかるのですか？

1ヨハネ1章9節に「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」という、すばらしい約束が記されています。これは神の約束です。神は誠実で、公正で、真実な方なので、ご自分の約束をやぶることはありません（イザヤ45章21節）。

信仰をもって真実なるお方を信じてください。聖書に記されているすばらしい神の約束を信じ、罪を告白することによって、あなたも罪を赦されきよめられたことを確信できるようになるでしょう。

10. クリスマンではない友人との関係はどうなるのでしょうか？彼らにどう思われるか、どんなことを言われるか心配です。

イエスに従うというあなたの新しい信仰のことを聞くと、あなたの友達はいろいろなことを言うでしょう。非難したり、冷たくなったりする人もいるかもしれません。その反面、その決断を称賛し尊敬する人もいるかもしれません。

イエスは、「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたの報いは大きいから。あなたがたより昔にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです」と言いました（マタイ5章11-12節）。

ですから、周りの人たちのあなたへの態度を過度に気にして、彼らの反応で傷ついたり、腹を立てたりしないように心がけましょう。「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。あなたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべてを主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい」（コロサイ3章16-17節）。イエスは多くの苦しみを通られ、悲しみを知る方でしたが、周りの理解ない人々からの批判・非難によって傷つくことはありませんでした。彼は痛みから来る苦々しい思いが彼の霊に根付くことを許されなかったのです。イエス・キリストのうちにある新しい者として、わたしたちの古い性質は死にました。私たちのうちにはイエスご自身が聖霊を通してともにいてくださいます。世間体や偏見を気にしてクリスマンであることを判断してはいけません。第二コリント人への手紙5章14-17節を読んでみましょう。

Cークリスマンとしての生活

11. 新しく信仰を持ったばかりのクリスマンが成長するために必要なステップは？

「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい」（2ペテロ3章18）。クリスマンとしての人生。それはキリストに倣った人格の形成、聖化と成長の旅路であると聖書は説きます。ヘブル6章1-2節を読んでみましょう。

イエスは私たちがキリストにあって「何をするか」だけではなく、キリストにあって「どのような人として成長していくか」という点を重要視されました。信仰を持ったばかりのクリスチャンが成長していく時に助けになる心の態度が三つあります。「従順であること」、「教えを受け入れる素直さ」、「学びと成長に対する強い意欲」の三つです（第2コリント10章5節、詩編32章8-9節、110章3節）。

神はあなたの内で働かれ、日々、神の御心に従いたいという願いを私たちの心に与えてくださいます。神の御心を実行する力を備えてくださるのも神です（ピリピ2章13節）。では、具体的にキリストが示してくださった成長のステップとはどのようなものでしょう。以下のリストを参考にしてください。

洗礼（バプテスマ）を受ける—マタイ28章19節

祈りの生活。神からの語りかけに耳を傾ける習慣、神の御心とそうでないものを聞き分ける識別する知恵を培う—第一テサロニケ5章17-18節

日々神のことは（聖書）を読む—詩編119章11節

他のクリスチャン兄弟姉妹との交流をもとめる。—使徒行伝2：42

パンを割く（聖餐にあずかる）—使徒行伝2章42

神の御国の働きのため捧げる（献金・奉仕）—第1コリント16章1-2

聖霊の力を受け取る—使徒行伝19章6節

聖霊の賜物を祈り求める—第1コリント12章31節

御霊の実（愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実）があなたの人生に豊かに実るよう、求める—ガラテヤ5章22節

周りの人々と、特にまだキリストを知らない人々と福音を分かち合う—使徒行伝1章18節

貧しい人々に対してよい行いをもって仕える—マタイ5章16節

喜びをもって主なる神に仕える—詩編100章2節

何をするにも、主に対してするように、心から、喜んで行う—コロサイ3章23節

賛美と感謝をもって神をほめたたえ、礼拝する—詩編149章

このリストは決して完璧なものではありません。しかし、私たちがキリストにあって成長し、神の御国の拡大に貢献できるようになるための参考にしてください。

12. クリスマンとして水による洗礼は必要ですか？

自分に洗礼を授けてほしい。そう神の御子に頼まれたバプテスマのヨハネは「私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたが、私のところにおいでになるのですか」と躊躇しました。そんなヨハネにイエスはこう語られました。「今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです」（マタイ3章13-17節）。こうしてイエスはバプテスマのヨハネにより、ヨルダン川の岸辺で洗礼をお受けになられたのです。後に、イエスは彼の弟子たちにこう命じました。「あなたがたは福音を宣教してあらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい」（マタイ28章19-20）。

使徒の働き2章38-39節の中でもこの教えがしっかりと引き継がれ、守られていることがわかります。ペテロは人々に「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです」と力強く宣教しました。

これらの聖書箇所から分かるように、イエスは私たちに洗礼を受けるように、そして洗礼を受けることを前提として宣教を行うよう教えられました。

私たちが洗礼を受けることに対し、これ以上の説明は必要ありません。イエスの教えに従順に従い、洗礼を受けようではありませんか。

13. 洗礼を受ける際、完全に水の下に沈まないといけないのですか？

新約聖書で使われている洗礼（バプテスマ）の原語はギリシャ語の「baptizo」です。この baptizo の直訳には「入れられる、浸されることによって聖別される」といった意味があります。マタイ3章15節にはイエスがバプテスマのヨハネによって洗礼を授けられる様子が記録されています。おそらく全身を水の下に沈めた形の洗礼であったと推測されています。

洗礼—それは、私たちクリスマンにとってイエスの命令に従うという霊的な側面だけでなく、信仰に関する象徴的な意味合いが大いにある行為です。完全に水の下に沈められる過程は私たちが自らの罪と過去の行き方に対して「死んで」、キリストと共に埋葬され、きよくされたことを象徴し、水から引き上げられる様子はキリストにあって、新しい人生のスタートすることを象徴しているのです（ローマ6章4節）。ですのでそれらの信仰的、霊的そして象徴としての意味合いを含め、洗礼は全身浸礼を意味すると考えます。

14. ヨルダン川で水の洗礼を受けたイエスは聖霊によっても洗礼を受けました。クリスチャンとして自分もこのような体験をすることができるのでしょうか？

イエスの洗礼に立ち会ったバプテスマのヨハネは、こう証ししています。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。・・・私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『聖霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。』私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです」（ヨハネ1章32-43章）。

イエスこそ神の聖い御霊（聖霊）によって私たちに洗礼を授けてくださるお方です（ルカ24章49節）。「ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受ける・・・」（使徒1章5節）。イエスのことばの通り、弟子たちはペンテコステの日に聖霊の洗礼（バプテスマ）を授かりました。使徒の働き2章1-4節を読んでみましょう。それ以降、他の弟子たち、新しい信者たちも次々と聖霊の洗礼（バプテスマ）を受けるようになりました。（使徒10章44-48節、19章5-7節）。ですから、私たちも力強くキリストの福音を証しするために、この素晴らしい聖霊のバプテスマを切望します（使徒1章8節）。

聖霊による洗礼を受けるだけではなく、私たちには大切な使命がイエスより与えられました。マタイ28章18-20節に記されている「大宣教命令」です。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは福音を宣教して、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」。

勝利に満ち溢れ、大胆で力強いクリスチャン人生のために、聖霊による洗礼（バプテスマ）を望み、求めましょう。聖霊による洗礼（バプテスマ）は神からの賜物—ギフトです。イエスがこの素晴らしい祝福をくださると確信しつつ、心から信仰をもって祈り願いましょう（ルカ11章13節、エペソ5章18節）。

15. 聖霊のバプテスマ（御霊による洗礼）とは？

聖霊のバプテスマとはイエス・キリストを信じる者に注がれる聖霊による力の満たしです。クリスチャンが大胆に、力強くキリストの福音を広め、主なる神様に仕えるために与えられます（使徒1章4-5節）。

イエスは復活されたのち何度も弟子たちの前に姿を現しました。ヨハネの福音書20章19節～23節にはこう記されています。「イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。『平安があなたがたにあるように。』こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示さ

れた。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスはもう一度、彼らに言われた。『平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。』そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。・・・」。

新約聖書の別の個所でも「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを受けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです」と、聖霊のバプテスマについて言及するイエスの言葉が記録されています（使徒1章4－5節）。

「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」（使徒1章8節）。

聖霊のバプテスマとは何かを理解するために、ぜひ以下の聖書箇所も併せて読んでください。

ルカの福音書24章49節

使徒の働き2章1－4節

使徒の働き2章17－39節

使徒の働き10章44－48節

使徒の働き19章5－7節

これらの個所からイエスの弟子たちや新しくイエスを信じた人々が聖霊のバプテスマを受け、預言や異言を話したこと、そして、宣教のための力（励まし）を受け取っていたことがわかります。私たちは今、イエスが復活され、そして再臨されるまでの間の時代、いわゆる「恵みの時代」を生きています。聖霊のバプテスマはイエスを信じる者すべてに与えられる特別な賜物なのです。

16. 祈りとは何ですか？ 必要なのですか？

クリスチャンにとってもっとも意義深く大切なこと、それは神との会話、つまり、「祈り」です。神は私たち一人一人と個人的な関係を持ちたいと望んでおられます。祈りは私たちの一方的な会話や願い事リスト、儀式的、形式的な言葉を超えるものです。静まり、神からの応答を待つこと、神からの語りかけに耳を傾けること、そして神のことばとそうでない惑わしのことばとを知恵をもって聞き分けること、これらすべてが「祈り」の大切な一面です。

「絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」（第一テサロニケ5章17－18節）。

神を信じる人々が祈りつつ歩むこと、また祈りを通して祝福を受けるように神は意図されました。祈りを通してもたらされる祝福にはこのようなものがあります。

神からの励まし、力が与えられる（第一歴代誌 16 章 11 節）

私たちの日々の必要が満たされる（マタイ 7 章 7 節、使徒 4 章 13 節）

誘惑に打ち勝つための能力、忍耐、知恵が与えられる（マタイ 26 章 41 節）

喜びにあふれる（ヨハネ 16 節 24 節）

神がどんな時も共におられることへの確信、平安（詩編 91 章 15 節）

信仰が増す、深められる（マルコ 11 章 24 節）

神の御心に沿ったことが何であるか判断できる知恵と知識（申命記 10 章 12－13 節）

聖書は私たちが忍耐強く、心を尽くして、いつでも祈るべきであると説きます（ルカ 18 章 1－8 節、エレミヤ 29 章 13 節）。また、信仰の友のために祈ることを怠ってはいけません（エペソ 6 章 18－20 章）。神に対して正しい畏敬の念と態度をもって、「みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように」祈りを捧げましょう（ヤコブ 5 章 16 節、マタイ 6 章 10 節）。このように祈りはすべてのクリスチャーンの信仰生活の要であり、必要不可欠なものなのです。祈りは神との会話なのです。

17. どうしたら私の祈りが聞かれたとわかりますか？神は私の祈ったことすべてにこたえてくださるのですか？

同じような問いをもった弟子たちにイエスは「神を信じなさい」とおこたえになりました。「まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、『動いて、海にはいれ。』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりになると信じるなら、そのとおりになります。だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。また立って祈っているとき、だれかに対して恨み事があったら、赦してあげなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの罪を赦してくださいます」（マルコ 11 章 22－25 節）。

また、詩編 91 章 14－16 節で神はこのように言われました。

「彼がわたしを愛しているから、わたしは彼を助け出そう。彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう。彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。わたしは、彼を長いのちで満ち足らせ、わたしの救いを彼に見せよう」。

こたえられる祈りには大切な前提条件が二つあります。一つ目はまずあなた自身が神を愛していること。そして二つ目はあなたが神との正しい関係にある（救われ、清められている）ことです。

ヨハネの福音書15章15-17節の祈りに関する素晴らしい約束を読みましょう。「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです」。

しかし、期待した祈りのこたえが受け取れない経験をするクリスチャンも少なくありません。考えられる原因はいくつかあります。

心の中の罪（イザヤ59章2節）

神の戒めに対する不従順（申命記1章45節）

疑い（ヤコブ1章6-7節）

自分の快樂のために、悪い動機による願い（ヤコブ4章3節）

あなたの望みと期待した結果が神の御心と違った（第二サムエル記12章15-23節）

あなたの望みと期待とは違った（より恵み多き）かたちで神が祈りにこたえられた（第2コリント12章8-9節）

18. 「霊において祈る」とはどういうことですか？（第1コリント14章15節、エペソ6章18節）

効果的なお祈りとは、神のご計画や目的に沿った祈りです。

「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます」（ローマ8章14-16節）。

パウロはエペソの信者たちに「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい」と激励しました（エペソの手紙6章18節）。

「御霊によって祈る」。それは信仰を通してのみ可能にされる祝福です。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいま

す。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいませ。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです」（ローマ8章26-27節）。パウロもこのような霊においての祈りを経験してきた一人です。彼がコリントの信者たちに書き送った手紙には祈りの手引きが残されていました。「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう。そうでないと、あなたが霊において祝福しても、異言を知らない人々の座席に着いている人は、あなたの言っていることがわからないのですから、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるのでしょうか。・・・私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝していますが、教会では、異言で一万語話すよりは、ほかの人を教えるために、私の知性を用いて五つのことばを話したいのです」（第1コリント14章12-19節抜粋）。

しかし、霊においての祈りが必ずしも異言を伴っているわけではありません。第2サムエル7章27節に記録されているダビデ王の祈る様子を読んでみましょう。神の神殿建設のために祈りをささげたダビデ王ですが、そのヴィジョンと祈りへの情熱をダビデ王にお与えになったのは神ご自身でした。「霊において祈る」鍵は信仰です。つまり、信じる者の信仰に基づいて、神は何を祈るべきか、どうしたら神の目的のために用いられる器になることができるかを教えてくださいませのです。信仰なくして神に喜ばれる者になることはできないのです（ヘブル11章6節）。

19. 聖書を読む意義はなんでしょうか？

聖書とは、私たち人類に啓示された神のことばです。神はこの聖書のことばを通して人類に語りかけておられるのです。聖書を読むことにより、神があなたに語りかける機会を作り出してくださいませ。そして、聖霊は神のことばを用いて私たちの内側に神聖で、幸いな人生を生み出してくれるのです（ヘブル4章12節、ルカ11章28節）。

神のことばをあなたの心に受け入れたくわえることにより、様々な恵みがもたらされます。

罪から遠ざけられる（詩編119編11章）

人生の道案内を得る（詩編119編105節）

あなたに知恵と喜びをもたらす（詩編19編8節）

イエス・キリストが神の御子であると明らかにし、彼の内に永遠のいのちがあることを示す（ヨハネ20章31節）

私たちに忍耐と励ましをもたらす（ローマ15章4節）

聖書の中のような例を通して神が私たちにどう関わられるお方なのか教えてくれる（第1コリント10章11節）

新約聖書に登場する人々は日々、熱心に御言葉を探り求めました（使徒17章2節）。私たちもそうあるべきです。聖書を通読するためにデポーションガイドや学びのプログラムを利用するとよいでしょう。一日一章読んだとしても聖書を通読するには一年もかかるのです。新しいクリスチャンにも、聖霊の導きと助けのもと、新約聖書を毎日学ぶことを強くお勧めします。

マタイの福音書22章29節でイエスは「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからです」と、ユダヤ人宗教指導者をたしなめました。聖書を読まないがためにとんだ思い違いをしていることがどれだけあることでしょうか。「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい」（第2テモテ2章15節）。

20. 教会って何ですか？本当の教会とはどのような教会ですか？

「教会」とはある一定の建物や法人団体、ソーシャルグループを指すものではありません。教会、それはキリストの愛と犠牲による救いを受け入れ、聖霊により生まれ変わったクリスチャンたちが集う、生きた共同体です。教会は地上における「キリストの体」だと例えることもできます（使徒20章28節、コリント1章17-24）。

「むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです」（エペソ4章15-16節）。

教会には神の御国の市民となった人々が集っています。教会の頭であるイエス・キリストは「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない」（ヨハネ3章3節）と言われました。「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません」（ヨハネ4章23-24節）。つまり、教会は神の国に属する者たちが霊とまことをもって父を礼拝する空間です。

新約聖書の中で「教会」を指すギリシャ語は“ekklesia”；「エクレシア」が使われていました。これは直訳では「呼ばれた・召されたもの」といった意味があります。真の教会とはこの世、罪と偶像礼拝から切り離された人々によって形成されたキリストの体なのです（第二コリント6章17-18節）。

21. どうしてキリスト教にはこんなにたくさんの教派があるのですか？

新約聖書の書かれた時代、各地の教会はそれぞれその教会がある街や地域で区分され、呼ばれていました（ピリピ1章1節、第1コリント1章26節）。しかし、三世紀ごろから教会の霊的生活が少しずつ変化し始め、中世の頃まで荒廃の一途をたどりました。神はその時以来、カルバン、ルター、ウィクリフ、ブリンガー、フーパー、ブースなど、正しい信仰を持った人々の心を動かし、教会が聖書の真実を改めて理解し、そこに立ち返るように働きかけられました。その他にも、ジョンとチャールズ・ウェスリーやマザー・テレサなど、多くのクリスチャンたちが当時の既存の教会にないユニークな聖書の真理の解き明かしを体験しました。

このような啓示を神から受け取った人々は多くの場合、苦渋の選択を強いられました。神の導きによる大胆な聖書読解に基づく彼らの信仰と情熱は、必ずしも当時の教会やコミュニティーに受け入れられたわけではありませんでした。神の召しに忠実に従うため、それらの人々は既存の教会の文化やしきたりと決別する必要があったのです。そのようにして起こった宗教改革の流れと様々な信仰的な刷新運動の中で新しい教派が生まれていきました。

昔から人々はある場所に特別な名前を付けたり、モニュメントや神殿を建てることで神聖な体験や教訓を覚え、後世に伝えようとしてきました（創世記35章14-15節、第2サムエル18章18節）。しかし、次世代の人々はほとんどの場合、自分たちの前の世代や先祖が抱いた畏敬の念や目的意識を見失ってしまいます。神の目的と計画は私たちがキリストの再来に備えることにあります（第2ペテロ3章14-15節、エペソ5章25-27節）。イエス・キリストはご自身の花嫁である栄光の教会のためにこの世界にまた戻ってこられます。そのために聖霊は神の真理と目的に従い、私たちの歴史の内に働いておられるのです。ですから、私たちもキリストの再来を切望しつつ、自分の属する教会や教派が聖霊の力により、常にそしてますますキリスト中心であるように祈り、求め続けましょう。

22. （継続的に）礼拝に出席することは大切ですか？

救われた人の特徴の一つは、その人が神を礼拝し賛美し、他のクリスチャンを愛して仕えたいという渴望を持っていることです。教会に繋がりに、礼拝に参加すればそれらを満たすことができます。

新約聖書時代のクリスチャンたちは絶えずともに集まり、生活、食事、財産までありとあらゆるものを互いに分かち合っていました。彼らは毎日定期的に宮（礼拝所）で礼拝を捧げ、またグループに別れて各々の家でも集まり聖餐（食事）を共にしました。神を褒め称えつつ感謝と喜びに溢れ、町中の人々が彼らに対して好意的でした。そして、日々新しく主の救いを受け入れ、教会の仲間となる人が与えられていたのです（使徒2章44-47）。

ヘブル人への手紙の中に「いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか」という、励ましの言葉があります（10章25節）。イエスも安息日にはシナゴグ（ユダヤ人の会堂）に出席し、聖典を朗読されました（ルカ4章16節）。

イエス・キリストが礼拝され、賛美され、貴ばれ、信じる者たちが互いに愛し合っており、聖書が教えられている教会に出席することで、あなたは大きく成長できるでしょう。もしあなたが教会に出席していないのであれば、または続けて関わることができずにいるのであれば、教会への出席が実現するよう真剣にお祈りください。

23. クリスマンなら正式に教会の会員になるべきですか？

救いの賜物を受け取り、洗礼を受けたのなら、これからどの教会の一員となるべきか、祈りを通して神の導きを求めましょう。教会はこの世においてのキリストの体の現れであり、神の家族の共同体であることを忘れないでください。教会家族の一員となるということは、そのコミュニティーの一員と認識されることであり、家族同士互いの成長に関わり、励ましあう関係になるということです（ローマ8章15節、ヘブル2章11-13節、エペソ5章23節）。

「このかしら（キリスト）がもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです」（コロサイ2章19節）。この箇所からキリストの「体」は互いに繋がっておりそれぞれが互いに対する責任と役目を持っていることがわかります。この体が健全に機能することで、そこにつながるすべての人が個人だけでなく、キリストの体全体で成長をすることができるのです。

新約聖書には新しく救われ、洗礼を受けたクリスマンたちがすぐさま教会の一員となっていた様子がかがえまます（使徒2章41節）。

24. どの教会に十分の一献金をするべきですか？

聖書はすべてのクリスマンに十分の一献金と捧げもの（その他の献金。例：感謝献金、災害救援献金、会堂建築献金など）を進んで行うよう教えています。

「『十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。』万軍の主は仰せられる。『わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。』」（マラキ3章10節）。

パウロはコリントの教会の信者たちにこう書き送りました。「さて、聖徒たちのための献金については、ガラテヤの諸教会に命じたように、あなたがたにもこう命じます。私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおののおの、いつ

も週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。私がそちらに行ったとき、あなたがたの承認を得た人々に手紙を持たせて派遣し、あなたがたの献金をエルサレムに届けさせましょう」（第1コリント16章1-3節）。また第2コリント8章1-5節にも献金に関して言及されています。苦しみのゆえ激しい試練の中にあってもマケドニアのクリスチャンたちは溢れんばかりの救いの喜びにより、エルサレムで苦難を強いられている聖徒たちのために惜しみなく献金を捧げました。それはマケドニアのクリスチャンたちが、エルサレムの聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいという熱心な願いを持っており、まず神のみこころに従って、自分自身を主にささげたことによる結果でした。

これらの聖書箇所から見いだせる原則として、収入の十分の一を捧げる献金はその人が所属する教会において捧げられるものであるということです。あなたが継続的に出席し、礼拝を守り、牧師による世話と霊の糧を受けている教会において、その教会の奉仕（ミニストリー）を支えるためにあなたの収入の十分の一の献金を捧げるとよいでしょう。

その他の捧げもの（献金）に関しては、いろいろなケースがあるでしょう。これらの献金は聖徒や教会、神の御国のための働き、宣教など、差し迫った必要があるところに神によって示された通りに捧げられます。多くの場合これらの献金も自らが所属する教会を通して捧げることができますが、現在ではオンラインなどで個人的に宣教師や宣教団体をサポートする献金を行うこともできます。イエスは弟子たちに言われました。「与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人々は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらうからです」（ルカ6章38節）。

25. 「安息日を聖とせよ（守る）」とはどういうことですか？

神が全世界を創造された際、神は六日のあいだ創造の業を行い、七日目を祝福し「聖」なる日とされ、休まれました。これによって神は七日間に一日は普段の仕事の手を休め、休息を設けるよう私たちに模範を示されました（創世記2章1-3節）。

イスラエルの民に十戒を授ける際も神は労働を六日間とし、七日目は仕事をせず「安息日」としてこれを守るよう命じられました（出エジプト20章8-11節）。

しかし、イエスがこの地上に来られた際、イエスはユダヤ教の宗教指導者であったパリサイ人を厳しく糾弾しました。なぜならパリサイ人たちは神が定められた安息日の本質をないがしろにし、安息日に関する様々な厳しい教えによって人々を縛り付けていたからです。「安息日は人間の（休息の）ために設けられたのです。人間が安息日のために造られたものではありません。人の子は安息日にも主です」（マルコ2章27-28節）

新約聖書の時代のクリスチャンたちは初めの頃は安息日（土曜日）にユダヤ人の会堂で会っていましたが、次第にユダヤ人の指導者たちとの食い違いが大きくなり、週の初めの日に集まり礼拝を捧げていました（使徒13章14-15節；44-52節、20章7節、第一コリント16章2節）。これは週の初めの日にイエスが復活されたことにも由来していると言えるでしょう（マルコ16章2節）。クリスチャンたちが週の初めである日曜日に毎週集まり、神を礼拝し、他のクリスチャンと交わりを持つことは、新約聖書による旧約聖書成就であるともいえるでしょう。これが現代の多くの教会とクリスチャンたちによって守られている安息日の過ごし方です。日曜日にどうしても休みが取れない人は週の別の日に安息日を設けることをお勧めします。休息を得て、神に感謝し、賛美するという使命さえ忘れなければ、それぞれがどう安息日を過ごすかは自由です。細かい規定や律法は基本的にはありませんし、あるべきではないでしょう。現代の旧約聖書から続く神が創立された伝統がイエスによって完成され、新たにされたものなのです（第2コリント5章17節）。

26. クリスチャンはお酒や薬物を摂取してもいいのですか？

飲酒や薬物乱用の問題は深刻な社会問題です。薬物やアルコール類はそれらの消費により巨大企業や犯罪組織に大きな富を生み出します。特に飲酒に関しては、毎年巨額の広告費が割かれ、お酒を飲むことを肯定し推し進める文化の中に私たちは暮らしています。このような世のプレッシャーの背後にはサタン（悪魔）が潜んでおり、彼はありとあらゆる方法で人を堕落の道へ引きずり込もうと働きかけているのです。飲酒や薬物を乱用させ、依存させることによって悪魔は人の人生を破壊します。それこそ悪魔の喜びであり、目的だからです。第一ペテロ5章8-9節にある聖書の教えを見てみましょう。「最大の敵である悪魔の攻撃に備えて、警戒しなさい。悪魔は、飢えてほえたけるライオンのように、引き裂くべき獲物を求めてうろつき回っているのです。信仰に堅く立って、悪魔の攻撃に立ち向かいなさい。ご存じのように、あらゆる地域のクリスチャンたちが、同じ苦しみを通っているのです」。

神は人間を実にユニークにお創りになられました。私たちに心と頭脳、そして自制心をお与えになられたのです。それゆえ、この世において私たちは日々自分の身と心を制し（健全なセルフ・コントロール）、罪と誘惑に対し抵抗する必要があります。悪魔は私たちのそのような性質をよく知っており、積極的に飲酒や薬物に手を出すように誘ってきます。なぜなら、酒や麻薬の影響は私たちに自制心、理性、コントロールを失わせ、悪魔の働きに無防備な状態を生み出すからです。

「自分の心をコントロールできない人は、堀を埋めた城のように戦う力がありません」（箴言25章28節）「酒を飲むと気が大きくなり、酔っぱらってけんかになります。酒に飲まれて失敗する者は愚か者です。」（箴言20章1節）酔っぱらったり、気分が高揚したり、意識を失うような飲酒や薬物の使用は私たちの罪の性質を助長し、悪魔の様々な攻撃にわざわざ身を明け渡すような行為です。

パウロはガラテヤの信徒達に警告しました。「生まれながらの悪い性質、つまり肉に従った結果がもたらすものは明らかです。すなわち、汚れた思い、好色、偶像礼拝、心霊術、憎しみ、争い、怒り、利己心、不平、あら捜し、排他主義とそこから出て来るまちがった教え、ねたみ、人殺し、泥酔、遊興、そのような種類のものです。前にも言いましたが、もう一度言いましょう。そのような生活を続ける者は、一人として神の国を相続できません」（ガラテヤ5章19-21節）。以下の聖書箇所もあわせて読んでみましょう。ローマ13章13節、エペソ5章18節、箴言23章20節、29-31節、第1コリント6章19節。

飲酒や薬物に手を出すことを問題とせず、推奨するような文化や社会があなたを取り巻いているかもしれません。しかし、私たちは酒や薬物とは一線を引くべきでしょう。「広くて歩きやすい道は正しい道に見えます。しかし、その終点は死です」（箴言16章25節）。私たちには聖霊による喜びと希望が約束されています。誘惑や弱さに立ち向かう力も神が必ず備えてくださるのです。

27. クリスチャンは煙草を吸ってもいいですか？

「知らないのですか。自分の主人は自分で選べるのです。死に至る罪を選ぶこともできれば、義（正しさ）に至る従順を選ぶこともできます。だれかに自分をささげれば、その相手があなたがたの主人となり、あなたがたは奴隷となるのです。神に感謝すべきことに、あなたがたは、以前は罪の奴隷になる生き方を選んでいましたが、今は、罪という古い主人から解放されて、義という新しい主人の奴隷になっているのです」（ローマ6章16-18節）。あなたは どうしてタバコを吸いたいと思うのでしょうか。タバコがないと不安ですか？心に平安が持てませんか？集中（もしくはリラックス）できませんか？タバコに依存（奴隷）になってしまっはいませんか？タバコがイエスが治めるべきあなたの人生の領域を占領しあなたを支配していませんか？

私たちクリスチャンは、キリストの霊が宿る聖なる神殿として、すべての肉の欲望を制するように聖書は教えます（第1コリント3章16-17節）。また、クリスチャンの心の中に住んでおられる聖霊が私たちの思いと行動をコントロールするとも教えています。その過程で時には肉体的な痛みを経験することもありうると第1ペテロ4章1-5節に書いてあります。だからこそ私たちは神により頼み、神の御心に従えるよう力を受け取るのです。神から与えられた人生を、はかなくむなしい罪の誘惑を追うことに費やさないで、聖霊を通してキリストがあなたの心を治めることを求めましょう。

そもそも、タバコは健康を害するものです。聖書は私たちが自分たちの体（健康）を守るよう教えます。神の神殿はいかなるものにも汚されるべきではありません。（第1コリント3章16-17節）

「キリストは、私たちの罪をその身に負って、十字架上で死んでくださいました。そのおかげで、私たちは罪から離れ、正しい生活を始めることができたのです。キリストが傷つくことによって、私たちの傷はいやされました」（第1ペテロ2章24節）。この御言葉

にあるように、キリストは私たちをすべての悪しき習慣や依存から救い出し、病と傷をいやすことができるお方です。

28. 世俗的な娯楽施設やイベントにクリスチャンとして遊びに行ってもいいのでしょうか？

クラブ、（ある種の）バー、ディスコ、カジノ、ロック・コンサートなどで代表されるいわゆる「世俗的な」娯楽施設やイベントは残念ながら私たちの良心や道德価値観を悩ませ、鈍らせ、結果的には私たちの霊的生活に悪影響を及ぼす場合が多いのが現実です。これらの「世の楽しみ」は一見無害に見えていても、よく吟味することで、それらの場所や内容、快楽の在り方がガラテヤ人への手紙5章19-26節で取り上げられている肉の欲に属することが見えてきます。これらは聖霊の実と反するものであり、クリスチャンとして関わらないことが賢明です。信仰者として普段何気なく見ているテレビや映画、聴いている音楽も注意して選ぶことが大切です。

あなたは神の尊い器です。神はあなたの中でそしてあなたを通してなさろうとしている素晴らしいご計画があります。そのためにも世の娯楽に時間と心を奪われてしまうのではなく、定期的な運動や健全なレクリエーションで心と体をリフレッシュさせて、神のためにいつでも万全の状態にいるよう心がけましょう。

29. もし新しいクリスチャンが間違いを犯したらどうなるのですか？

私たちの創造主、父である神は人間の必要なものをすべてご存知です。神は私たち、クリスチャンが自らの失敗や過ちによって挫けて落胆しても必ずまた立ち上がれるよう素晴らしい約束をくださいました。

まず、神は私たちが罪や過ちを告白すれば私たちを許し、清めてくださると約束されました（第一ヨハネ1章9節）

イエス・キリストにある満ち溢れる豊かさによって、私たちの必要なものを必ず満たしてくださると約束されました（ピリピ4章19節）

完全で最も偉大な祭司である、神の御子イエス・キリストご自身が私たちを助けてくださると約束され天に昇られました。「私たちを助けるために天にのぼられた偉大な大祭司、神の子イエスが味方になってくださるのですから、私たちの告白する信仰を決して失うことがないようにしましょう。15 この大祭司は私たちと同じ試練に会われたので、人間の弱さをよく知っておられ、ただの一度も、誘惑に負けて罪を犯したことはありません。16 ですから躊躇せず、神の御座に近づいてあわれみを受け、時にかなって与えられる恵みをいただくではありませんか」（ヘブル4章14-16節）。

最後に、「神の子どもたちはみな、神に従います。そして、キリストに信頼することによって、この世の悪に打ち勝つことができるのです。イエスを神の子であると信じる人以外に、世との戦いに勝て

る人はいません」(第1ヨハネ5章4-5節)。「神様は決して、とてもたち打ちできないような誘惑や試練に会わせたりはなさいません。神様がそう約束されたのであり、その約束は必ず実行されるからです。神様は、あなたがたが誘惑や試練に忍耐強く立ち向かえるように、それから逃れる方法を教えてください」(第1コリント10章13節)。

30. 信仰から離れてしまったり、つまずいて、道をそれてしまったクリスチャンをどう助けたいですか？

「愛する皆さん。もしだれかがあやまちを犯したら、聖霊によって歩むあなたがたは、やさしく謙遜な気持ちでその人を助け、正しい道に立ち返らせてあげなさい。また、自分自身も悪の道に落ち込まないように気をつけなさい。互いの悩み、苦しみを共に負い、キリストの命令に従いなさい。りっぱな人間である自分が、なにもそこまで身を低くする必要はないと思う人は、自分を偽っているのです」(ガラテヤ6章1-3節)。

そして、信仰をもってその友人のために祈りましょう。もし神に導かれるようでしたら断食をして祈りましょう。「その祈りが信仰によってさげられたものなら、病気は治るでしょう。もし病気の原因が罪によるものなら、主はその罪を赦してくださいます。ですから、互いに罪を告白し、祈り合いなさい。正しい人の祈りは大きな力があり、驚くほどの効果があります」(ヤコブ5章15-16節)。

第2ペテロ1章1-10節には、私たちがつまずくことなく、また道をそれてしまわないようにするにはどうあるべきか書いてあります。この箇所をその友人と分かち合い、神が奇跡を行ってくださることに期待しましょう。

31. もしクリスチャンが落胆し、うつ状態になってしまったらどうしたらいいのでしょうか？

ダビデ王の生涯を見てみましょう。彼は試練や困難に見舞われ、幾度となく落胆し、ひどく落ち込みました。しかし、それらの経験を通して、彼は辛い感情や悩みを乗り越える素晴らしい道を見出したのです。「しかし、私のたましいよ、気落ちするな。動転するな。神に期待せよ。神がすばらしいことをしてくださり、私はきっと賛嘆の声を上げるのだから。このお方こそ、私の命綱、私の神」(詩編41章11節)。神への賛美。これこそが落胆とうつ状態から抜け出す最善の方法です。今は底知れない悲しみや、挫折感にさいなまれているかもしれませんが、神が過去にあなたに与えてくださった祝福を思い出し、それを感謝しましょう。そしてこれからなさってくれる素晴らしい御業、恵みと救いの約束のゆえ、神を賛美しましょう。

ダビデによって詠まれた別の詩編をご覧ください。「正しい人は、主の導きに従って歩みます。主はその一步一步をお喜びになります。たとえ倒れても、それで終わりではありません。主がしっかり支えておられるからです」(詩編37章23-24節)。

ピリピでの伝道の働きの最中に、パウロとシラスは捕らえられ、鞭打たれた後牢屋に入れられました。長い旅による疲労、傷む体、いつ出ることができるか分からない牢屋の中……。二人には心を挫かれ、落ち込んでしまう理由がたくさんありました。しかし、その真ただ中で二人は神に祈りと賛美を捧げていたのです。神は奇跡を行われ、二人は牢から解放されただけでなく、看守とその家族全員が救いを受け入れることになりました（使徒16節23-26節）。

使徒パウロはその他にも様々な苦難と迫害を通り、その結果、試練の中にいる人を助ける素晴らしいことばを沢山残しました。「ですから、信仰によって神の目に正しい者とされた私たちは、主イエス・キリストによって、神との間に平和を得ています。信仰のゆえに、キリストは私たちを、いま立っている、この最高の特権ある立場に導いてくださいました。そして私たちは、私たちに対する神の計画がすべて実現するのを、喜びをもって待ち望んでいるのです。ですから私たちは、さまざまな苦しみや困難に直面した時も喜ぶことができます。それによって忍耐を学ぶからです。忍耐によって私たちの品性が磨かれ、さらに、それによって希望が与えられるのです。こうして、私たちの希望と信仰は強められ、どんなことにも動じなくなるのです。この希望は失望に終わることはありません。それは、神が聖霊を与えてくださり、その聖霊が私たちの心に神の愛を満たしてくださっているからです」（ローマ5章1-5節）。

神があなたの味方であり、共におられることをしっかりと心に留めましょう。聖書を通して神はあなたに語り掛けます。神からのささやきに心を開きましょう。あなたの好きな讃美歌やワーシップソングを通して感謝と賛美を神に捧げましょう。

最後に、うつ状態は時にその人の心身の不調や病気に起因することもあります。そのような場合、きちんと専門的な医者にかかり的確なアドバイスや治療を求めることが大切です。いかなる場合でも、癒しのために祈り続けましょう。

32. 「聖化」とは何ですか？

「聖化」ということばには、神にあって聖く「別たれる」、「取り分けられる」または「区別される」という意味があります。あなたがイエスによる救いを受け入れ、神の御国の一員として生まれ変わったその瞬間から聖化が始まります。救いとともあなたの中に神の聖い御霊—聖霊が訪れ、宿ってくださいます。聖霊は神の目的のため、あなたがますます聖なる人生を求めようと働かれます。すべてのことを通してあなたをますます神に引き寄せ、清め、キリストに似たものとして成長させます。この聖霊の働きこそが「聖化」の過程です。

私たちが人生を通して聖化の道を歩んでゆくためには、従順な信仰をもって自らを聖霊の働きに明け渡す必要があります。それは、私たちを罪から清め、贖うことのできるイエスの犠牲の血があつてこそ、可能となる奇跡です（第1コリント1章30節）。「罪を離れて自分をきよく保っているなら、キリストの最高の目的のために用

いていただける器になれるでしょう」(第2テモテ2章21節)。
「あなたがたは聖霊によって、きよい者、神に喜ばれる者とされています」(ローマ15章16節)。

D 一ゆるがない信仰の土台

33. 「救いの信仰」とは何ですか？

「メシヤのわたしは、神から離れ、迷っている者を救うために来たのです」(マタイ18章11節)。「わたしが来たのは世を救うため、さばくためではないからです」(ヨハネ12章47節)。これらのイエスのことばから分かるように、罪にとらわれているこの世界のことを神は心にかけてくださっておられ、神が用意してくださった救いを全世界すべての人が知るように願っておられます(ヨハネ3章16節)。

「それでは、救われるために、私たちは何か誇れるようなことをしたでしょうか。何もしていません。なぜでしょう。私たちは自分の善行によって無罪とされるのではないからです。それは、キリストが成し遂げてくださったことと、キリストに対する私たちの信仰に基づいているのです。つまり、私たちが救われるのは、キリストを信じる信仰だけによるのであって、善行によるのではないのです・・・」(ローマ3章27-28節)。キリストを信じる信仰は神を喜ばせます。そして信仰を持つ機会はずべての人に与えられています。「からし種」ほどはかなく、小さいものではあっても、私たちに生まれつき信仰を持つ心が備えられているからです。神を喜ばせる信仰は「キリストについてのことばに耳を傾けることから始まるのです」(ローマ10章17節)。

ガラテヤ人々にパウロはこう書き送りました。「というのは、いくら律法に従おうと努力しても—それは失敗以外にないのです—神の恵みは決して受けられないことがわかったからです。キリストを信じて初めて、神に受け入れられることがはっきりわかったのです」(2章19節)。キリストを信じる信仰、これこそ人生の意義と永遠のいのちを与える「救いの信仰」にほかありません。

34. どうしたら強い信仰をもつことができますか？

イエスの弟子もこれと同じ質問をしたことを知っていますか？信仰に関して教えている聖書の箇所をいくつか読んでみましょう。

「ある日、使徒たちが主に、『もっと信仰を強くしたいのですが、どうしたらいいでしょう』と尋ねました。イエスの答えはこうでした。『ほら、あそこに桑の木があるでしょう。ほんの小さな、からし種ほどの信仰でもあれば、あの木を根こそぎ海の中へ投げ込むことぐらい簡単なことです。そう命令しさえすれば、たちまちそのとおりになります』」(ルカ17章5-6節)。「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神のもとに来ようとする人はだれでも、神の存在と、熱心に神を求めれば神は必ず報いてくださることを、信じなければなりません」(ヘブル11章6節)。「信

仰は、キリストについてのことばに耳を傾けることから始まるのです」（ローマ10章17節）。

福音に耳を傾けましょう。聖書のことばに心を開きましょう。そうすればこれらのことばがあなたの糧となり、信仰を育むこととなります。聖書を手に取り、特にイエスの生涯を記録した四つの福音書を熟読しましょう。あなたの人生のすべての事柄に関して、祈って、神と対話することも大切です。自分の周りの人々のためにも祈りましょう。神があなたの祈りを聴いてくださっていることを実感し、祈りの答えを受け取っていくことであなたの信仰はさらに深まることでしょう。

マタイの福音書21章21-22節に、イエスが弟子たちに信仰について教えた箇所があります。「よく聞きなさい。あなたがたも、信仰を持ち、疑いさえしなければ、もっと大きなことができるのです。たとえば、このオリーブ山に、『動いて、海に入れ』と言っても、そのとおりになります。ほんとうに信じて祈り求めるなら、何でも与えられるのです」。

35. どうしたら信仰において成長できますか？

使徒パウロはローマにいるクリスチャンたちを励まして、試練や困難によって私たちの信仰は試され、強められると言いました。人生の多くがそうであるように、私たちは実践や実体験を通してのみ物事の真価を問うことができます。「ですから、信仰によって神の目に正しい者とされた私たちは、主イエス・キリストによって、神との間に平和を得ています。信仰のゆえに、キリストは私たちを、いま立っているこの最高の特権ある立場に導いてくださいました。そして私たちは、自分たちに対する神の計画がすべて実現するのを、喜びをもって待ち望んでいるのです。ですから私たちは、さまざまの苦しみや困難に直面しても喜ぶことができます。それによって忍耐を学ぶからです。忍耐によって私たちの品性が磨かれ、さらに、それによって希望が与えられるのです。こうして、私たちの希望と信仰は強められ、どんなことにも動じなくなるのです。この希望は失望に終わることはありません。それは、神が聖霊を与えてくださり、その聖霊が私たちの心に神の愛を満たして下さっているからです」（ローマ5章1-5節）。私たちが信仰に従って行動し生きる時、神は喜んでくださいます。人生の困難に直面した時こそ、イエス・キリストを信頼し、希望を告白し、信仰を実践しましょう。その歩みの積み重ねによって、あなたの信仰はさらに強く成長することでしょう。

36. 死んだ信仰とはどういうことですか？

残念なことに、多くの人々がむなし「偶像」を信奉しています。私たちの祈りを聞く力もなく、ましてや、私たちを救うこともできない「偽りの宗教」、「人」、「もの」、「制度」や「システム」を信じ、それらに希望を置く信仰。このような「信仰」は偶像礼拝と呼ばれ、「死んだ信仰」であると聖書は教えます。あなたがどれだけ時間やお金を捧げても、これらの偶像が私たちのことを真に心

にかけて、愛することはありません。偶像はあなたに対して様々な要求を突き付けますが、実際あなたにはなんの興味も持ちません。

偶像は被造物、つまり、造られたものです。すべてのものの創造主であり、生きておられる神とは違います（イザヤ44章9-17節）。群像礼拝は「人の手で作った金や銀の偶像を拝みます。口があってもしゃべれず、目があっても見えず、耳があっても聞こえず、呼吸もしていない偶像を拝んでいるのです。偶像を作る者や、信仰する者も、同じく愚かです」（詩編135章15節）。死んだ信仰に救いはありません。それとは対照的に「キリストの血は、どれほど確実に私たちの心と生活を変えることでしょう。キリストご自身のささげられた血は、古い規則に縛られる悩みから私たちを解放し、生ける神にお仕えしたい気持ちに駆り立てるのです。それは、一つの罪も欠点もない完全なお方が、聖霊の助けによってご自分を喜んで神にささげ、私たちの罪のために死んでくださったからです」（ヘブル人への手紙9章14節）。生きた信仰を持ちましょう。

37. 信仰と奇跡にはどんな関係がありますか？

どんなに弱く、小さな信仰しかなくとも、時には信仰がない場所でも神は御心のままに奇跡を行われます。奇跡には大きく三つの側面があります。神ご自身の栄光の現れとしての奇跡、人々を信仰へと招待する奇跡、祈りと信仰に対する答えとしての奇跡（祝福、癒しなど）です。新約聖書にはイエスが行われた様々な奇跡が記録されています。代表的なものをいくつか読んでみましょう。

死から蘇ったラザロの奇跡（ヨハネ11章1-45節）。「マリヤについて来てこの出来事を見た多くのユダヤ人が、イエスを信じるようになりました」（45節）。

小さなからし種ほどしかない信仰でも奇跡はおこるとイエスは弟子たちにお教えになりました（マタイ17章20節）。途中で揺らいでしまうほどの頼りない信仰しかもっていなかったペテロも、水の上を歩くという奇跡を体験しました（マタイ14章25-34節）。

ルカの福音書7章1-10節に登場するローマ軍の隊長は、彼の深い信仰のゆえにイエスに褒められました。この隊長は実際に奇跡を目にする前からイエスの権威と神の力を信じ、イエスのおことばだけで彼の部下はいやされると信じました。盲目であったバルテマイも、続く出血で悩まされていた女も、「あなたの信仰があなたを治したのです」とイエスに慰められた人々でした。（マタイ10章52節、5章34節）。

その反面、イエスの生まれ故郷の町ナザレでは、人々の強い反感と不信仰のゆえにイエスは「ほんのわずかの奇跡を行われただけで」（マタイ13章53-58節）。

どんなに弱く、小さな信仰であったとしても、神は私たちの信仰を受け入れてくださいます。私たちが心から神を探し求め、信仰を捧げるとき、神は奇跡をもって答えてくださいます。神は溢れるばかり

りの恵みと愛のゆえに私たちが全く想像もしていなかった奇跡を行われることもあります。奇跡は私たちが信仰を持つきっかけとして働きます。奇跡は神の超越されたお力を私たちに悟らせます。奇跡を信じる、体験することによって私たちの信仰はますます強められ、増し加えられていくでしょう。

38. どうして信仰は神を喜ばせるのですか？

愛に基づいた人間関係の中で私たちは相手に心を開き、そこに信用や信頼が生まれます。「信仰」とは神に対する私たちの信頼と確信のあらわれです。神は私たちと親しい関係を築きたいと望んでおられます。神の私たちへの愛はすでに十字架の上で示されました（第1ヨハネ4章9節、ローマ5章8節）。ですから、今度は私たちが神への信頼（信仰）をもって応答する番です。「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神のもとに来ようとする人はだれでも、神の存在と、熱心に神を求めれば神は必ず報いてくださることを、信じなければなりません」（ヘブル11章6節）。では、信仰とは何なのでしょう？ 聖書はこう教えます「それは、望んでいることが必ずかなえられるという確信です。また、何が起こるかわからない先にも、その望んでいることが必ず待っていると信じて疑わないことです。神を信じた昔の人たちは、この信仰によって賞賛されました。信仰によって私たちは、この世界が神のことばによって造られ、しかも、それらが無から創造されたことを知るので。」（ヘブル11章1-3節）。神は昔から信仰を持つ人々を祝福されました。さらに、神への信仰は私たちに健全でゆるがない世界観をもたらします。信仰は私たちに世界の起源を悟らせ、人生に知恵と目的を与えます。信仰のゆえに、わたしたちは神のことばを信じ、神のことばに従います。だからこそ、神への信頼（信仰）を神は喜ばれるのです。

39. なぜクリスチャンは断食をするのですか？

「断食についてですが、偽善者たちのような、人目につくやり方は避けなさい。彼らは、やつれた顔をわざと見せつけ、同情を買おうとします。よく言っておきますが、そういう人たちは、もうそれで、報いを受け取ってしまったのです。断食をする時は、むしろ晴着をまといなさい。そうすれば、だれもあなたが断食をしているとは気づかないでしょう。しかし、あなたの父は、どんなことでもご存じです。そして、報いてくださるのです」（マタイ6章16-18節）。この聖書箇所から推察できるように、クリスチャンの断食は神とその人の個人的な問題であり、他人の感心を得るために行うものではないことがわかります。

正しい断食には強い自制と我慢が強いられます。そのような忍耐は私たちの心身の鍛錬となり、肉の欲を克服し、従える助けとなります。その他にも、私たちの祈りや願いがどれだけ切実なものであるか神に訴えるため、問題や困難からの突破口を求めるために断食を行うこともあります。また、この世には祈りと断食によらなければ追い出せない悪霊がいると、イエスは弟子たちに語りました（マタイの福音書17章21節）。断食により霊が強められ、聖霊の働きにさらに敏感になれることも知られています。ルカの福音書2章3

6-40節には神殿を一步も離れず、祈りと断食に明け暮れていた女預言者のアンナが登場します。靈的に研ぎ澄まされていた彼女にはイスラエルが待望していた救い主イエスの訪れを預言する祝福が与えられました。

神との親しい交わりと自らの靈性のために断食を行うのは有益です。定期的な断食は胃腸に休息を与え、体内にたまった毒素を排出するのに効果的だともいわれています。空腹の経験を通してもっと神に近づきたいという靈的な渴望を強めるために断食を行う人もいます。しかし、持病や体調に不安のあるクリスチャンは断食を行う前にきちんと医者のアドバイスを受けましょう。

最後に、主に仕える人びとを選別し、送り出す際に断食が行われた例を使徒の働きから紹介します。「ある日、彼らが礼拝をささげ、断食していると、聖霊が、『バルナバとパウロに、わたしの特別な仕事をさせなさい』と言われました。それで彼らは、さらに断食して祈ったあと、二人に手を置いて任命し、送り出しました」（使徒13章2-3節）。使徒14章2節にも似たような事例が記録されています。このように、私たちが教会のリーダーを選び、任命する際にも断食をもって臨むことが有効であると理解できるでしょう。

E-神のご性質に近づき、成長する。

40. イエスについてまわった「群衆」と「弟子」の違いは何ですか？

イスラエルの各地を巡り、教え、数々の奇跡を行われたイエスのまわりには、次第に大勢の群衆がついてまわるようになりました。これらの人々はイエスの教えに大変興味を持っていましたが、自らをイエスに捧げて、主に仕える覚悟もしくは準備ができていない人々でした。彼らの多くはイエスの行う奇跡を求め、教えを聞きはしますが、それらの教えを理解し従うまでに至りませんでした（ルカ8章4-15節、ヨハネ6章24-42節）。このような群衆とは別にイエスと密に行動を共にし、イエスの「弟子」と呼ばれた人々がいました。彼らはイエスを「ラビ」（先生・教師）、そして「主」と認識し、イエスに従うためにこれまでの生活、仕事や家族を離れてイエスについてきた者たちでした。

では、この二つのグループ「群衆」と「弟子」の違いから私たちは何を学ぶことができるのでしょうか。最初のグループである「群衆」は、単なる自分本位の追従者であり、主に対する献身が伴わない傍観者だと言えるでしょう。仮に聖書の御言葉を受け入れても、その後信仰において成長せず、ついには信仰の芽を枯らせてしまうケースが例えとして挙げられます（マタイ13章）。その反面、「弟子」はイエスの救いを受け入れ、自分の人生の主権をイエスに明け渡した人々を指します。弟子となる人々はイエスと個人的な関係を持つことを切に望み、イエスのことばに従い、イエスの愛にとどまり、聖霊の力によって歩むことを経験し、日々成長してゆきます（ピリピ1章4-6節）。イエスの弟子である私たちクリスチャンは、「弟子」という言葉の通り、イエスを人生最良の師匠、そして模範として信頼し、従い、彼の教えによって鍛錬される人生を歩み

ます。また、イエスは私たちが弟子として成長するだけでなく、主のためにさらなる弟子を育てるようにと命じられました。「だから、福音を宣教し、すべての人々をわたしの弟子とし、彼らに、父と子と聖霊との名によってバプテスマ（洗礼）を授けなさい。20 また、弟子となった者たちには、あなたがたに命じておいたすべての戒めを守るように教えなさい。わたしは世界の終わりまで、いつもあなたがたと共にいます」（マタイ28章19-20節）。弟子をつくり、またその弟子が新たな弟子を育てることができるように励ましあう。これを弟子訓練と呼びます。弟子訓練こそ神が私たちを用いて福音を全世界に広げるために選ばれた戦略なのです。

41. クリスマンとして敬虔であることが重要なのはなぜですか？

イエス・キリストこそ、この地上に来られた神ご自身であり、神のご性質の現れです。英語で Godly character（神のご性質に似た）と表現される「敬虔な、信心深い、聖い」人格を培うことはクリスマンとしてとても重要です。キリストの弟子であるわたしたちは、この地上におけるキリストの代理（大使）として全世界に遣わされています（第2コリント5章20節）。ですから、私たちは忠実にキリストの志を全うできるよう、ますますキリストの愛に根差し、キリストご自身に似たものと変えられ、主のご性質を反映させる存在として歩むよう召されているのです（第1ヨハネ4章7-17節、第2コリント3章18節）。

イエスが私たちに与えてくださったのは永遠のいのちであり、永遠の救いです。私たちはこの福音（すばらしい知らせ）を受け入れることによって生まれ変わりました。神の御国の市民として、一生涯をかけて神に仕える新しい人生を手にしたのです。ですから、私たちはその尊い使命と祝福にふさわしい資質・性質を培ってゆく必要があります。使徒パウロ、ペテロ、ヨハネはそれぞれ教会のリーダーを選別する際、候補者の人格をしっかりと見定めるよう指導しました。敬虔で、神の御心にかなった人格を兼ね備えた人でなければ監督、執事、長老、牧師として任命されるべきではないと使徒たちは教えます（第1テモテ3章1-16節）。候補者の中に見出されるべき性質はガラテヤ人への手紙5章22-23節に記されている「聖霊の実」と一致します。「聖霊が生活を支配してくださる時、私たちのうちに、次のような実を結びます。愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です」。その反対に「生まれながらの悪い性質、つまり肉に従った結果がもたらすものは明らかです。すなわち、汚れた思い、好色、偶像礼拝、心霊術、憎しみ、争い、怒り、利己心、不平、あら捜し、排他主義とそこから出て来るまちがった教え、ねたみ、人殺し、泥酔、遊興、そのような種類のもです。前にも言いましたが、もう一度言いましょう。そのような生活を続ける者は、一人として神の国を相続できません」（ガラテヤ5章19節）。

この世の終末が近づくにつれ、クリスマンとして生きてゆくのがますます難しくなる時代が来ると聖書は預言します（第2テモテ3章1-17節）。しかし私たちクリスマンは、そのような困難の時でも聖霊の助けを受け、謙虚で敬虔な生活を続けるよう求められ

ています。イエスはこう語られました。「ですから、わたしのうちに生きるよう心がけなさい。またわたしが、あなたがたのうちに生きられるようにしなさい。枝は幹につながっていなければ、実を結べないでしょう。同じようにあなたがたも、わたしから離れたら、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたはその枝です。人がわたしのうちに生き、わたしもその人のうちに生きているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては何もできません」（ヨハネ15章4-5節）。イエスが私たちに送ってくださった聖霊の力添えがこのような奇跡を可能にし、私たちの人生に「聖霊の実」を実らせます。私たちは、無条件で与えられるキリストの純真で絶えない愛のゆえに、感謝し、慎み深く、そしてますます神の国の奉仕に情熱を燃やします。クリスチャンにとって聖く、敬虔であることは、救いを受け取り神に仕えることと切り離すことのできない、成長と祝福の過程なのです。

42. どうしたら「誠実」（高潔）な人になれるのですか？

いわゆる「高潔」で「誠実」な人とは、セルフコントロール（自制）ができていて、正直で信頼のおける、真実に忠実な人のことです。特にパウロ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブはキリストに連なる人々の高潔さと誠実さの大切さを繰り返し教えました。

「いつまでも残るものが三つあります。信仰と希望と愛です。その中で最もすぐれているものは愛です」（第1コリント13章13節）。信頼は愛を基盤として培われます。もし私たちが愛し合っていないければ、お互いを信頼しあうことはできません。高潔で誠実な人は無条件で他の人を愛します。

第1テモテ3章2節には、教会内の監督（長老）の役職に就く人は、結婚しているならば、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位のある人でなければならぬと教えています。「誠実に語り、誠実にふるまい、誠実に生きて、常に真理に従うことを喜び、あらゆる点で、教会のかしらであるキリストにますます似た者となるのです。このキリストのもとで、各器官が結び合わされ、体全体がしっかりと組み合わされて成長し、愛にあふれるようになるのです」パウロはそう言ってクリスチャンたちを励ました（エペソ4章14-16節）。結婚における誠実さと真理を愛する姿勢は高潔な人生の証しです。

「ことばを制御できる人は、すべての点で自分を完全に制することができる人です」（ヤコブ3章2節）。「キリストを知れば知るほど、その偉大な力を通して、私たちが神に従う正しい生活を送るために必要なすべてのものをいただくことができるのです。そればかりかキリストは、ご自分の栄光と共に敬虔や品性をも、私たちに与えてくださるのです。さらに神は、それによって、すばらしい約束を与えてくださいます。この約束のゆえに、私たちは欲望のもたらす滅びから守られ、キリストのご性質を備えた者となれるのです。これらの贈り物をいただくために、あなたがたはあらゆる努力をして神を理解し、神が何を望んでおられるかを知らなければなりません

ん。また、自制心を持ち、忍耐と敬虔を身につけなさい。さらに、兄弟愛を持って互いに愛し合い、神の愛に生きなさい。これらが備われれば、あなたがたはますます強められ、主イエス・キリストのために多くの有益な働きができるのです」（第2ペテロ1章3－8節）。これらの聖書箇所も高潔で誠実な人生を歩むための指針が書かれている箇所の一つです。ぜひ繰り返し読み、実践しましょう。

最後に誰よりも高潔さの重要性を痛感し、追い求めた聖書の登場人物ダビデの詠った詩編を見てみましょう。詩編15章には、なぜ私たちが誠実で高潔であるべきかを説いたダビデの切実な祈りがあります。

「主よ。聖なる山にある主の天幕に行き、
自分の避け所を見いだす人はだれでしょう。
それは、責められるところのない生活を送る、
誠実そのものの人です。
人を中傷せず、うわさ話に耳を貸さず、
隣人を傷つけたりしない人です。
罪に対してははっきりと声を上げ、
罪を犯した者にはそれを指摘し、
主に忠実に従う者を尊ぶ人です。
自分に害が及ぼうとも、約束を破らない人です。
高い利息で負債者を窮地に追い込むことも、
わいろを受け取って、
無実の人に不利な証言をすることもない人です。
このような人は、いつまでも
しっかりと立ち続けることができます」。

43. どのようにして教会の「執事（牧師を補佐する信徒）」は任命されるのですか？

執事になる人は、牧師（監督）の職に就こうとする人と同じように敬虔で安定した人物であることが求められます。監督職を求める人に必要とされる資質は第1テモテ3章1－7節に挙げられていますが、執事の場合「大酒を飲まず」「不正な利益をむさぼらない」「キリストに真心から仕え」「陰口を言わない」人であることが特記されています（8－12節）。このように、執事は教会のリーダーとしてふさわしい資質と人格を備えていることによって選ばれ、

任命されます。「執事の務めをりっぱに果たす人は、人々から尊敬され、また主への信仰の確信を強められて、二重の報いを受けることになります」（13節）。そのような人はいずれ、牧師（監督・長老）としての任務を担うのにふさわしい人として認められることでしょう。

44. 牧師（監督・長老）になるために必要な資格は何ですか？

「『人がもし牧師になりたいと願うなら、それはすばらしいことである』ということばは真実です。牧師になる人は、非難されるところがなく、一人の妻の夫で、勤勉で思慮深く、折り目正しい生活をしている人であるべきです。また、客をよくもてなし、聖書を教える力がなければなりません。酒飲みでも、乱暴者でもなく、やさしく親切で、金銭に執着がなく、子どもたちをしつけ、よく家庭を治める人でなければなりません。自分の小さな家庭すら治めきれない人が、どうして神の教会を指導できるでしょう。また、牧師となる者は、クリスチャンになってまだ日の浅い人ではいけません。高慢になる危険性があるからです。高慢は堕落の前ぶれです。また、教会外の人からも、評判の良い人でなければなりません。非難を受けて、悪魔のわなにはまらないためです」（第1テモテ3章1-7節）。この箇所に牧師としての働きを志す人が求めるべき生活と資質の指針がはっきりと示されています。

追記として、2節に注目してください。聖書は男女は結婚を通して「一体となる」と教えています。参照：創世記2章24節、マタイ19節5章、マルコ10章8節、エペソ5章31節、第1コリント7章39節。この夫婦が一体であるという聖書の理解は、つまり奉仕における夫の役目は彼の妻とともに担われていることを意味し、またその逆もあることを私たちに教えています。私たちは（男と女ともに）神のかたちとして、神に似せて創造されました。男女（夫婦）が一体となり調和の中で神に仕えることは神の御心にかなったことです。

F 一神の御国とは？

45. どうやって神の御国に入るのですか？

ヨハネの福音書3章3-21節を読みつつ、この問いの答えを探していきましょう。「とっぷり日も暮れたある夜のこと、パリサイ人で、ニコデモという名のユダヤ人の指導者がイエスに会いに来ました。『先生。だれも、あなたが神から遣わされた教師であることを知っております。あなたのなさる奇跡を見ればわかることです。』『そうですか。でもよく言っておきますが、あなたはもう一度生まれ直さなければ、絶対に神の国に入れません。』ニコデモは、思わず言いました。『ええっ、もう一度生まれるのですか。いったい、どういうことですか。年をとった人間が母親の胎内に戻って、もう一度生まれることなどできるわけがありません。』『よく言っておきますが、だれでも水と御霊によって生まれなければ、神の国には入れません。人間からは人間のいのちが生まれるだけです。けれども御霊は、天からの、全く新しいいのちを下さるのです。もう一度

生まれなければならないといって、驚くことはありません。風は音が聞こえるだけで、どこから吹いて来て、どこへ行くのかわかりません。御霊も同じことです。次はだれにこの天からのいのちが与えられるか、わからないのです。

実に神は、ひとり子をさえ惜しまず与えるほどに、この世界を愛してくださいました。それは、神の御子を信じる者が、だれ一人滅びず、永遠のいのちを得るためです。神がご自分の御子を世にお遣わしになったのは、世をさばくためではなく、世を救うためです。この神の子を信じる者は、永遠の滅びを免れます。しかし信じない者は、神のひとり子を信じなかったので、すでにさばかれていますのです。そのさばきに会ったのは、天からの光が世に来ているのに、行いが悪く、光よりも闇を愛したからです。彼らは天からの光をきらい、罪が暴露されるのを恐れて、光のほうに来ようとしません。しかし正しいことを行っている人は、喜んで光のほうに来ます。神の望まれることを行っていることが、はっきりわかるためです」(ヨハネ3章3-21節)。

「もう一度生まれる」ために、私たちは自分の罪を認め、自己中心的な生き方を悔い改める必要があります。それとともに、イエス・キリストを救い主として受け入れ、私たちの心に招き入れましょう。キリストの救いを受け取った人のもとには神の聖い御霊、聖霊がお入りになります。こうして私たちは新しい命を受け取り「もう一度生まれる」ことができるのです。「だれでもクリスチャンになると、内側が全く新しくされます。もはや今までと同じ人間ではありません。新しい人生が始まったのです。この新しい出来事はすべて神から出ています。神様は、キリスト・イエスの働きによって、私たちをご自分のもとに連れ戻してくださいました。そして、この恵みによる神との和解を、すべての人に勧める特権をも、私たちに与えてくださったのです。つまり、キリストによって、この世をご自分と和解させ、その罪を数え立てずに、かえって帳消しにしてくださいましたのです。これが、人々に伝えるようにと私たちにゆだねられた、すばらしい知らせです。こういうわけで、私たちはキリストの大使です。神様が、私たちの口を通して語りかけてくださるのです。キリストが懇願しておられるかのように、キリストに代わって、あなたがたにお願いします。どうか、差し出された愛を拒まず、神様と和解してください。それは神様が、罪のないキリストに私たちの罪を負わせ、それと引き換えに、私たちに恵みを注いってくださいましたのですから」(第2コリント5章17-21章)。

イエスの弟子たちも、イエスが復活された後におとずれたペンテコステの日に聖霊によってもう一度生まれる体験をしました。こうして霊も心も新たにされ、強められ、福音の恵みと喜びに満たされた信者たちは全世界にこの良い知らせを広めていったのです。それは現在、今もまさに続いている救いの奇跡です(ヨハネ20章19-22節)。

46. 神の御国を見ることはできますか？

「いよいよ来るべき時が来ました。神の国が近づいたのです。みな、悔い改めて、福音を信じなさい」(マタイ1章15節)。神の

御国の訪れには二段階あると考えることができます。私たちクリスチャンの中に存在する神の御国、そしてイエスの再臨とともに完全なる形をもって確立される永遠なる神の御国です。神の御国は今、ここに存在しているとともに、これから訪れる現実でもあるのです。

神の御国—今

ルカの福音書 17章 20-21節において、イエスは弟子たちに天の御国は目で見える王国とは異なることを教えられました。「イエスは答えて言われました。『神の国は、目に見える形では来ません。ここに来た』とか、『あそこに来た』とか言えるものではないのです。はっきり言いましょう。神の国は、あなたがたの中にあるのです」。また、使徒パウロも「神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです」と証しました（ローマ 14章 17節—新改訳）。聖霊の働きにより、私たちは自己中心な生き方から脱却し、人生の主導権、心の王冠をイエスに明け渡すことができます。こうして私たちは神の御国の市民となり、私たちの中に神の御国が存在するようになります。このことから、神の国とは神の支配下にある人、状態、空間を指していることが理解できるでしょう。そして、この神の国は、私たちを通して私たちのまわりの人々やコミュニティーに確実に影響を及ぼしていきます。実際に神の国は見えなくても、私たちはキリストの弟子たちの人生、つまり、クリスチャンたちの生きる姿の中に神の国の存在を見ることができるのです。

神の御国—これから

この世界に対する神の最終目的は、ご自身の愛する被造物を罪から贖い、癒し、再生することです（イザヤ 65章 17節、黙示録 21章 1-8節）。その目的が達成された暁には、存在するものすべてが神の御国に属する世界へと生まれ変わります。神ご自身が全世界を支配し、私たちは神との完全なる調和のなかに生きる新しい世界が創造されるのです。イエスはこの最終的な神の御国が「近くに」来ていることを示す「しるし」、「前兆」や「出来事」に関しても幾度となく言及されました。ルカの福音書 21章 5-36節を読みましょう。この神の御国は信じる者に希望を与える将来についての約束です。

47. 神の御国が存在する証拠は何ですか？

神の御国が存在する何よりの証拠は、生まれ変わったイエスの弟子たちの人生にあります。イエスが捕らえられた夜、弟子たちは我先にゲッセマネの園から逃亡し、十字架につけらるイエスを遠くから見ていることしかできませんでした（マタイ 26章 55節、ルカ 23章 49節）。しかし、イエスの復活を目撃し、ペンテコステの日に聖霊を受け、神の王国の存在と救いを確信した彼らは生まれ変わりました。迫害も死をも恐れぬ御国の伝道者へと変えられたのです（マルコ 16章 20節、使徒 4章 19節）。彼らが祈ることにより、地上に神の力が解き放たれ、癒しや奇跡がもたらされました。イエスを信じ、神の御国の市民とされた人々が享受する聖霊の力、

祝福、平安と喜びに満ちた人生と証しの数々は今日でも神の御国が確かに存在する証拠です。

48. 福音を宣べ伝えることと、神の国を宣べ伝えることは、（どう）ちがうの？

「イエス・キリストが私たちの身代わりとして、十字架の上で罪を贖い、救いの御業を達成してくださった」・・・この素晴らしいニュース（報せ）が福音であり、これを宣べ伝えることが福音伝道です。「神の御国を宣べ伝える」とは、イエス・キリストによって支配されている神の御国は世界のどの王国、国家より尊く、勝れていると宣言することです。イエスはすべての権力の上に存在されるお方であり、将来すべての国々がイエスの権威の前にひれ伏す日が来ることを聖書は預言しています。神の御国が宣べ伝えられるごとに、この世を支配している不信仰、罪と悪の勢力は脅かされ、敗退していくのです。新約聖書には、奇跡や癒しをもって神の御国を宣べ伝えたイエスの証が新約聖書のいたるところに記録されています。（マタイ4章23-15節）。

神の御国はキリストを受け入れ、主の主権に従うクリスチャンの人生の中に存在します。神の御国は現在、信者の人生を通して具体化されつつあり、同時に、私たちは未来における御国の完全なる現れをキリストの再臨とともに待ち望んでいるのです。マタイの福音書24節14章には御国についてのすばらしい知らせが全世界に宣べ伝えられ、すべての国民がそれを耳にしたのち、キリストが地上に戻ってこられると書いてあります。そのためには多くの働き人が必要です。私たち一人一人がその宣教の働きに召されているのです（マタイ9章35節）。

G-政府や権力

49. 神の御国は国家や政府にとって代わるものですか？

大いなる力と栄光をもってイエスが再臨されるその日まで、神の御国があなたの国の政府にとって代わることはありません。ローマ人への手紙13章の冒頭部分を読めば、国家や政府は私たちを助け、秩序を保つために神が建てられた権威であり、監督者であることがわかります。

では、イエスが再臨され、神の御国がこの世界に完全に現わされたとき何が起こるのでしょうか。ヨハネの黙示録11章15-18節にはこう書かれてあります。「第七の天使がラッパを吹き鳴らすと、天から大きな声が響きました。『世界はすべて、主とキリストの手に渡った。主は永遠に支配者である。』すると、神の前の席にいた二十四人の長老が、地にひれ伏して礼拝し、声をそろえて神を賛美しました。『今も、昔も存在される全能の神、主に心から感謝します。あなたが偉大な力を発揮して、世界を支配する王となられたからです。諸国の民はあなたに怒りを燃やしましたが、今度は、あなたの怒りが下される番です。今や、地を滅ぼす原因となった者たちが滅ぼされる時が来たのです。死者がさばかれ、あなたに忠実に仕えた者が報いを受ける時です。預言者も、クリスチャンも、すべて

あなたの名をほめたたえる者は、小さい者も大きい者も、あなたから報いを受けるのです』」。続けて17章12-14、17節も読んでみましょう。

世の裁きと終末が必ず訪れることを悟ったパウロは、こう祈りました。「どうか、主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、あなたがたに知恵を与えて、キリストがどのようなお方か、何をしてくださったかを、正しく、はっきりと理解させてくださいますように。また、心にあふれるほどの光が与えられて、神があなたがたを召して与えようとされる将来を、はっきり見きわめることができますように。また、信じる者を助ける神の力が、どれほど偉大であるかを知ることができますように。この同じ偉大な力が、キリストを死者の中から復活させ、ほかのどんな王、支配者、権力者、指導者よりもはるかに高い、天の神の右の座につかせたのです。このキリストの栄誉は、この世だけでなく、次に来る世でも、他のすべてにはるかにまさって輝かしいものです。そして神は、すべてをキリストの足の下に従わせ、キリストを教会の最高のかしらとされました。ですから教会は、キリストの体であって、すべてを造り、すべてを満たすキリストの霊が満ちあふれるところです」（エペソ1章18-23節）。あなたが今置かれている場所で主にある希望を告白し、自分の国や政府の指導者が神に救われるように祈りましょう。神の御国の証しである教会（信仰者同士の交わり）が祝福されますように、神の知恵と守りがあなたのコミュニティと共にあるように祈りましょう。

50. 政府や法律に従わなければいけませんか？

あなたがここで思い浮かべている政府や法律が罪と悪を愛する支配者であり、あなたに罪を犯すよう強要するようなことがない限り、クリスチャンは自分の政府や国、それらによって定められた秩序と法律に従順に従うべきです。

パウロが自身の愛弟子、テモテに書き送った手紙にはこう書かれています。「そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願ひ、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです」（第1テモテ2章2-5節・新改訳）。

すべての権威は神によって立てられており、神によらない権威はないとパウロは教えました。むやみに権威に逆らうことは神に逆らうことと同じであり、よって、神の聖徒たちもしかるべき支配（者）と社会の法に従い、納めるべき税金をきちんと納めることが正しいのです（ローマ13章1-7節）。しかし、使徒の働き5章29節にはペテロと弟子たちが神の働きを妨害しようとする権威に逆らい、人（地上の支配者）ではなく、神（創造されたすべてのものの

支配者)に従うことを選び行動した証しが記録されています。このように、時に神の御心に忠実であるため、地上の権威に従うことができない場合もあることを心にとめておきましょう。

「正しい人が治めると国民は喜び、悪者が権力を握ると嘆きます」(箴言29章2節)。ヨハネの黙示録には神の権威に逆らい地に破滅や混乱をもたらした罪が裁かれる様子が描かれています。

「・・・天から大きな声が響きました。『世界はすべて、主とキリストの手に渡った。主は永遠に支配者である。』すると、神の前の席にいた二十四人の長老が、地にひれ伏して礼拝し、声をそろえて神を賛美しました。『今も、昔も存在される全能の神、主に心から感謝します。あなたが偉大な力を発揮して、世界を支配する王となられたからです。諸国の民はあなたに怒りを燃やしましたが、今度は、あなたの怒りが下される番です。今や、地を滅ぼす原因となった者たちが滅ぼされる時が来たのです。死者がさばかれ、あなたに忠実に仕えた者が報いを受ける時です。預言者も、クリスチャンも、すべてあなたの名をほめたたえる者は、小さい者も大きい者も、あなたから報いを受けるのです。』」(11章15-18節)。

51. クリスチャンとして権威を敬うべきでしょうか？

ペテロは権威を敬わないのは汚れた心の持ち主であると言いました。「これらのことでわかるように、主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、不義な者どもを、さばきの日まで、懲罰のもとに置くことを心得ておられるのです。汚れた情欲を燃やし、肉に従って歩み、権威を侮る者たちに対しては、特にそうなのです。彼らは、大胆不敵な、尊大な者たちで、栄誉ある人たちをそしって、恐れるところがありません。それに比べると、御使いたちは、勢いにも力にもまさっているにもかかわらず、主の御前に彼らをそしって訴えることはしません」(第2ペテロ2章9-11)。もしあなたがいかなる権威に対しても、値すべき敬意を払わないのなら、あなたが人の上に立つ立場となり、権威を持つようになっても、敬意を払ってもらえると期待することはできません。権威に対する不敬や無礼は社会の混乱と無秩序に繋がります。そのような敬意、愛、信用が欠けた無政府状態において、落ち着いた信仰生活を営み、クリスチャンのコミュニティーを育むのは大変難しいことです。コミュニティーのメンバー1人1人を敬い、正しく権威を認め敬意をはらう暮らしは、愛をもってお互いを支えあう社会形成に不可欠です。

52. イエスの教えには過激なものが沢山あります。私たちは社会に対して反抗的な(反社会的な?)態度で生きていくべきですか？

イエスの過激で革命的で急進的な教えをいくつか見てみましょう。

自分自身に対するように隣人を愛する。

右の頬を叩かれたら左側も差し出す。

サマリヤ人(疎まれ、差別されている人々)の世話をする。

ツアラウトに冒された人（重い皮膚病で追放された人々）を癒し、社会的に回復させる。

知らない他人をもてなし、喜んで費用を負担する。

ローマ軍の将校（侵略者）の部下を癒す。

1マイルの労働を強いられたら2マイルの働きを捧げる。

自分が得することや、返ってくることを期待せず貸す。

他人を裁かない。

さらに、イエスは、様々な奇跡を行いました。水をワインに変え、身分が低い者、貧しい者、小さいものに誉を与える天の御国の存在を説きました。実のなっていないイチジクの木を枯らせ、湖の上を歩き、嵐を静めました。わずかな食糧で5000人を満腹にし、神の御心を見失った宗教指導者たちを糾弾しました。

この世界には様々な「王国」（霊的、精神的なものや比喩も含む）が存在します。権力者の私利私欲と墮落した世界の悪の影響下にある「王国」は権力を乱用し、人々を支配しようとします。それにより、弱者がないがしろにされたり、差別や暴力が蔓延る社会が生み出されています。このような霊的な観点から考えると、私たちはイエスの弟子として悪の王国（支配）に反抗・抵抗する生き方を求められていると言えるでしょう。しかし、私たちの生活と社会の秩序を守る社会や法に対してむやみに反抗することは神の御心ではありません（参照 Q.49&Q.50）。「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです」（エペソ6章12節—新改訳）。神の王国は全く正反対の価値観の上に成り立っています。神の支配が与えてくれるものは愛による真の解放と自由です。囚われている人々が自由になるために、神からの知恵、聖霊に導かれた洞察と判断、霊的な力、忍耐と悪への抵抗（暴力や軍事力ではない）をもって戦い、神の御心が天でなるようにこの地上でも行われることを祈り求めましょう。

53. デモクラシー（民主主義）はクリスチャン的な政治ですか？

民主主義、または民主政治はすべての成人に選挙権を与え、一般市民の積極的な政治参加を認め、個人の権利、平等と自由に重きを置いた政治です。真実と誠実さ、そして信頼に基づいた民主政治が行われる社会は栄え、うまく機能します。立候補者はなぜ自分が人々の代表として選ばれるにふさわしいか、どのような政治を行っていくつもりか真実を語り、有権者は選択肢を吟味し最善の候補者に投票します。また、選挙の管理運営を担う人も選挙が公平に行われるよう取り仕切るため、誠実であることが求められます。そのような段階を経て選ばれた政府は混乱、悪、不正をただし、人々が自由に健全な生活を送ることができる社会を目指します。正義を求める政治は国に繁栄をもたらします。民主主義の土台となる教えは旧約聖書の十戒に見いだすことができます（創世記20章）。十戒の理念

に基づいた法律の下では、人々は恐怖ではなく自由を享受できるのです。しかし、十戒をないがしろにした「民主主義」は不完全であり、最悪の場合、人々の対する呪いとなりうるでしょう。

クリスチャンが信仰と誠意をもって政治に関わり、聖書の原則、自由と愛（隣人愛）を基盤にした政策を促進させることは可能です。民主主義はそのためのよいプラットフォームを提供できます。しかし、政治や社会のシステムが「クリスチャン」になることはできません。クリスチャンとはイエス・キリストを通して神と個人的な関係を持つ人のことを指すからです。また、国政に携わる人々全員が神と和解し、クリスチャンとならない限り、その国の政治（政府が）完全にキリスト教的なものなることは難しいと考えられます。イエスが栄光と力とともに再臨される時、神の完全なる支配が私たちの世界を統べ治めるようになります。その日を待ち望みましょう。

H—多文化社会について

54. クリスチャンになったので、私の民族的・文化的な帰属意識は失われてしまうのですか？

この多様・多文化な世界をお創りになったのは創造主である神です。被造物は実に変化に富んでおり、生物にも様々な種類が存在します。この世界に溢れる多様性は神の英知を体現しており、神に限界がないことを示しています。神に栄光をもたらしているのです。その素晴らしい多様性の中で特に注目したいのが言語です。それぞれの民族に異なった言語があり、それぞれ異なった呼び名で創造主である神を呼んでいます。

中国語では「造物主神」—Zàowùzhǔ shén

アラビア語では「المنشى」—almunashiy allah

マオリ語では「Te Atua te Kaihanga」または「Io」

ヒンディー語「निर्माता भगवान」—nirmaata bhagavaan

神は人類を創造されてから今日まで、異なった民族、異なった言語と文化を持つすべての人々に働きかけてこられました。様々な言葉や民族の起源といえば旧約聖書に記録されているバベルの塔の物語が有名です。バベルの塔での高慢をご覧になられた神は、今後も人々が結託して神に反抗することがないように、人類の言葉を混乱させ民族ごとに人々を地上の各地に散らされました（創世記11章）。その数千年後、イエスは弟子たちに「あらゆる国（言語、人種、文化、国）の人々を弟子としなさい」と明確な使命をお与えになります（マタイ28章18—20節—新改訳）。「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます」（マタイ24章14節—新改訳）。神は世界中に散らされた人々のこと決してお忘れになりませんでした。

新約聖書、ヨハネの黙示録 21 章 24-27 節には「諸国の民」が天の宮に集い、ともに主を礼拝する預言的な描写があります。ヨハネはこの幻のなかで、人々がそれぞれ違った民族、人種であることをはっきりと認識しました。もし、信仰を持つことで私たちの人種や民族的な独自性（アイデンティティー）が失われてしまうならば、ありえないはずの光景です。これらの個所から神が文化、言語、人種、民族の多様性を愛され、祝福されておられることがわかります。神は全世界すべて人々を心にかけておられるのです。

ところで、民族的なアイデンティティーは失われなかつつも、救われた私たちはそれぞれ自分の文化、伝統の内に含まれる悪しき風習（聖書の教えに反するもの、偶像礼拝）をもしっかりと見極める必要があります。そのためには、私たちは神の聖さと真理を何よりも求めつつ、聖霊の導き、信仰と悔い改めをもって取り組むべきです。教会のリーダーも率先してこの課題に向き合う必要があります。教会内に存在するある文化が別の文化よりすぐれていると勘違いし、ある一定のしきたりや考え方を他の兄弟姉妹に強要してはいけません。それぞれが、自らの文化的背景を神の御前に差し出し、聖霊の導きと与えられた確信をもって変えられていくプロセスが大切です。

55. なぜ神はこれほどにも沢山の民族（人種）を造られたのですか？

旧約聖書の創世記に描かれている人類の歴史から、この質問の答えの手がかりを探してみましょう。はじめに、神はお創りになられた最初の人、アダムとイブに「生めよ。ふえよ。地を満たせ」（創世記 1 章 28 節—新改訳）、「地に増え広がり、大地を治めよ」（同箇所—リビングバイブル）と仰せられました。地上には次第にアダムとイブの子孫が増えていきます（創世記 4 章～6 章）。しかし、アダムとイブの過ちにより罪がこの世界に入り込んでいたため、「地上に人の悪が増大」し（創世記 6 章 5 節—新改訳）、神は「人を造ったことを後悔し、心を痛め」洪水をもって地上の生けるものすべてを滅ぼすことを決意されます（創世記 6 章 5 節）。その洪水から救われ、唯一生き延びたのは主の御心にかなったノアとその家族、そして箱舟に乗せられた生き物たちでした（創世記 6 章～9 章）。洪水が治まると、神はノアと息子たちを祝福し、あらためて人々が全地に増え広がるようにと命じられました（創世記 9 章 1 節）。ノアの子孫を通して人類に新しいスタートが与えられたのです。

こうして、ノアの子孫が増え始めたころ、バベルの塔が建設されました。このバベルの塔の物語、様々な言語や民族の派生の起源を見つけることができます。聖書を読んでみましょう。

「はじめのころ、人類はみな同じことばを話していました。しだいに人口が増えると、人々は東の方に移って行きました。こうしてシヌアル（バビロン）の地に平原を見つけ、大ぜいの人々がそこに住みついたので。やがて大都市を建設しようという話が持ち上がりました。永久に残る記念碑として、天にも届くような塔を造り、自分たちの力を見せつけようというのです。『こうやって一致団結すれ

ば、あちこちに散らされる心配もなくなるだろう。』そう豪語すると、人々はよく焼いた固いれんがをうず高く積み上げ、アスファルトで固めました。神は降りて来て、人間たちが造っている町と塔をごらんになりました。『なんということだ。同じことばを使い、一致して事に当たると、人間はこれだけのことをやすやすとやり遂げてしまう。この分だと、これからもどんなことを始めるか、わかったものではない。思ったことを何でもやってのけるに違いない。地上へ降りて行って、彼らがそれぞれ違ったことばを話すようにしてしまおう。そうすれば、互いの意思が通じなくなるだろう。』こうして、神は人間を世界の各地に散らしたので、都市建設はもうできなくなりました。この都の名がバベル〔「混乱」の意〕と呼ばれたのは、このためです。つまり、神がたくさんの国語を与えて人間を混乱させ、各地に散らしたのが、この地だったからです」（創世記 11章1-9節）。

洪水から生き延びたノアの子孫は、神から与えられた「地に広れ」という命令を無視して、集団でシヌアルの平地に定住します。同じ言葉を話していたため互いに意思疎通ができた人類は一致団結し、またもや神に反抗することを選びました。人々がまたこのように団結して神のご計画に逆らうのを阻止するため、神は人々のことばを分け民族ごとに分断されたのです。

バベルの塔の後、言葉ごとに民族が別れ出て、各地に散っていった様子が創世記に記録されています。言葉、住む環境、習慣、信仰の違いから、長い年月を経てさらに様々な文化、民族が世界中に派生していきました。そして神による人類救済のご計画の下アブラハムを始祖としたユダヤ民族を通して救いの御子が地上にお生まれになり、救いの御業が成し遂げられたのです。様々な民族と言葉の違いという様々な壁が存在する混沌とした世界に、救いの希望がもたらされました。この救いの福音は、言葉と国と文化を超えて宣べ伝えられ、人々に御霊による愛と一致をもたらします。イエス・キリストの救いは、バベルの塔での出来事を超越し人類に救いと癒しを与えるのです。

56. イエスはユダヤ人の神で、私（日本人）には関係ないのではありませんか？

確かに、イエスはパレスチナの地にお生まれになり、ユダヤ人としてトーラー（旧約聖書・モーセの五書）、詩編、ソロモン王の知恵（箴言）の教えに親しんで育ちました（ガラテヤ4章4節）。イエスはイスラエル民族の起源と歴史に精通しており、彼の弟子もみなユダヤ人でした。

イエスが誕生する2000年ほど前、神は、人類を救うご計画に基づいてアブラム（後にアブラハムと改名される）という一人のカルデア人をお選びになり、こう仰せになりました。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福され

る」（創世記12章1—新改訳）。神はアブラハムと祝福の契約を結ばれ、彼の子孫を通して世界の国々に救いと祝福がもたらされることが約束されました（22章）。こうして誕生したのがイスラエル民族です。イスラエルの民は神の御心を世界に伝える特別な役割を担っていました。神はアブラハムとの約束のゆえに、ご自身の神の独り子、救い主イエス・キリストを生まれさせる民族としてイスラエル民族をお選びになったのです（ヘブル7章を読みましょう）。

イエスはご自分がユダヤ人であることを認識し、ガリラヤの各地を巡りユダヤ人の会堂で教えられました（マタイ4章23節、マルコ1章39節）。しかし同時に、救いの祝福は全世界、すべての人々へもたらされるものであることを弟子たちに何度も強調されました（ルカ24章47節、使徒1章8節）。ユダヤ民族は、神の祭司としての国民、救いと祝福をこの世にとどける仲介役を担った民族でした。ただ、私たちの救い主は確かにユダヤ人としてお生まれになりましたが、イエスが証しされた神はこの世界の造り主であり、生けるものすべてを統べるお方です。ユダヤ人はもちろん、世界の人々すべてを分け隔てなく愛し、哀れまれるお方です。創造主であられる神、イエス・キリストは日本人の神でもあられるのです。

参照：マタイ24章14節、28章18—20、マルコ16章15節、黙示録5章9節、詩編22章27節、67章2節

I 一神

57. 神が人間を造ったのなら、神を造ったのはだれなんですか？

神は誰かによって造られた存在ではありません。神はご自身についてこのように語られました。「わたしはアルファであり、オメガである」（黙示録1章8節—新改訳）、「今も昔も存在し、やがて来られる全能の主なる神・・・わたしはあらゆることの初めであり、終わりである」（黙示録1章8節、11節）。

「まだこの世界に何も無い時から、キリストは神と共におられました。キリストは、いつの時代にも生きておられます。キリストは神だからです。このキリストが、すべてのものをお造りになりました。そうでないものは一つもありません。キリストには永遠のいのちがあります。全人類に光を与えるいのちです。そのいのちは暗闇の中でさんざんと輝いていて、どんな暗闇もこの光を消すことはできません」（ヨハネ1章1—5節）。

宗教は人が作り出しました。しかし、創造主なる神はすべての始まりのその前から存在され、そこにおられる方です。イエス・キリストは誰かによって創り出された存在ではありません。神ご自身が、私たちにご自身を表されることを選ばれ、ナザレの地に人の子としてお生まれになりました。その証が聖書に記録されており、これは歴史的史実です。この聖書を通して神は今も私たちに語りかけてくださいます。キリスト教は宗教ではなくこの神と正しい関係をもって生きる道であり、救いの希望なのです。

58. 人はそれぞれ違った神々を信仰したり、しなかったり、なぜ世界にはいろいろな「神」と「信仰」が溢れているのですか？

ローマ人への手紙の中でパウロはこのような質問に対してこう答えました。「世界が創造されてからこのかた、人々は、天地や、神がお造りになったすべてのものを見て、神の存在とその偉大な永遠の力をはっきり知っていました。ですから、彼らには弁解の余地がありません。彼らは、確かに神を知っているのです。けれども、そのことを認めず、神を礼拝せず、日々神に守られていることを感謝しようとしません。やがて彼らは、神がどのようなお方か、また自分たちに何を求めておられるかについて、愚かなことを考えるようになりました。その結果、彼らの心はくもり、訳がわからなくなったのです。『神なんか信じなくてもいい、自分は賢いのだ』と主張しながら、実際には、全くの愚か者になってしまいました。そして、栄光に輝き、永遠に生きておられる神を礼拝する代わりに、木や石で、鳥や獣や蛇あるいは滅ぶべき人間の偶像を造り、それを神としたのです。・・・彼らは、神の真理を知っていながら信じようとせず、あえて偽りを信じる道を選びました。そして、神によって造られた物を拝みながら、それらをお造りになった神には従いませんでした。すべてのものの創造主である神こそ、永遠にほめたたえられる方です」（1章19－25節抜粋）。

旧約聖書にあるイザヤ書は、人の手によって作られ、祈りに応えることもできない偶像を礼拝することの虚しさと、そのような人々への戒めが多く語られています（イザヤ46章）。「天と地にあるものの何を引き合いに出して、わたしと比べようというのか。わたしと等しい者を、だれか探すことができるか。わたしを、金と銀を惜しげもなく使った偶像と比べるつもりか・・・やましいところのある者よ、このことを忘れるな。わたしがはっきり何度も、将来何が起こるか告げてきたことを忘れてはならない。わたしだけが神であり、わたしのような者はいない。何が起こるかを教えることができるのは、このわたしだけだ。わたしの言ったことは、みなそのとおりになる。・・・わたしはあなたがたを救う。遠い将来ではなく、今すぐに。」（イザヤ46章5－10節、13節より抜粋）。

聖書は人の愚かな知恵と過信、高慢から偶像が作り出され、それゆえ地には偶像礼拝や誤った信仰宗教が溢れていると説明しています。この問題の根源は私たちの「罪」にあります。罪は人と神の関係を壊し、私たちを霊的に死んだ状態、盲目の状態に縛っておこうと日々働いているのです（第2コリント10章5節）。悪魔の策略は人々がむなしい偶像や宗教によりどこを見だし、生涯本当の救いを受け取ることができないようにすることです。また、神から引き裂かれ、実に悲惨な状況にある私たちが、そのことに対しても無知、無関心でいることを何よりも喜んでるのは悪魔です。

しかし、私たちの「罪」を取り除き、神との関係を修復し、救いの道を打ち立てられたお方がいます。それはイエス・キリストです。私たちはイエスを通して神がどのようなお方であるかはっきり見ることができるのです。神は今すぐに私たちを救えるお方です。私た

ちの全幅の信頼と賛美を受けるに値する唯一の神です。真の救い主、イエスを信じましょう。

59. 神が全世界を造られて、全能のお方なら、なぜ今すぐにでも悪魔を滅ぼして完璧な世界を取り戻さないのですか？

ヨハネの黙示録を読めば、神が悪魔を滅ぼし、罪が存在しない素晴らしい世界を新生されるご計画を進めておられることがわかります。イエスが地上に来られてからすでに二千年の時が流れました。なぜ、神は今すぐにでも悪魔を完全に滅ぼされないのでしょうか。ここで私たちが覚えておきたいのは、神のご計画には神がお定めになられた時があることです（詩編75章2節、ハバクク2章3節、箴言3章1節）。今はまだ、人類に対する神のご計画がすべて達成されておらず、わたしたちは神のご計画が進行中の世界に生きているということです。

マタイの福音書13章にある「毒麦のたとえ」を読みましょう。

「畑とはこの世界、良い麦の種というのは天国に属する人々、毒麦とは悪魔に属する人々のことです。畑に毒麦の種をまいた者とは悪魔であり、収穫の時とはこの世の終わり、刈り入れをする人とは天使たちのことです。この話では、毒麦がより分けられ、焼かれますが、この世の終わりにも同じようなことが起こります。わたしは天使を送って、人をそそのかす者や悪人たちをより分け、炉に投げ込んで燃やしてしまいます。悪人たちは、そこで泣いて歯ぎしりするのです。その時、正しい人たちは、父の国で太陽のように輝きます。聞く耳のある人はよく聞きなさい」（37-43節）。毒麦と麦をより分けようとする使用人に対し、まだ麦が成長しきっていない状態で毒麦を抜こうとしたら大切な麦の芽まで抜いてしまうかもしれない、「収穫の時まで、放っておきなさい。その時がきたら、まず毒麦だけを束ねて燃やし、あとで麦はきちんと倉庫に納めればよいのだ」と農場主が答える場面があります（28-30節）。これこそが、人類に対する神の忍耐の姿勢であり、ご計画であり、定められた刈り入れの時まで悪魔と毒麦が存在することを許されている理由です（黙示録14章15節）。

悪魔が完全に滅ぼされ、神がこの世界を解放される日が来ます。

「しかし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天使ばかりか、神の子さえも知らないのです。ただ父だけがご存じです」（マタイ24章36節）。まず、救いの福音がすべての人々に伝えられなければなりません（質問 No.54 を参照）。そして、イエスの再臨までに起こると預言された出来事が神の御言葉の通り、成就されるでしょう（マタイ24章）。神は終わりの日に悪魔と悪魔に従い悪い行いを重ね、最後まで神を信じなかった人々を裁く計画を準備されています（黙示録12章）。主を信じ、忠実だった人々は新しい復活の体と永遠のいのちが与えられます。イエスと共に、聖い、信仰の民（クリスチャン）が力と、愛と、真理で地を統べるようになる日が来ます。その日に向けて、私たちが持っている希望と戒めを再確認しましょう。

イエス・キリストにあって私たちに勝利をお与えになる神に感謝を捧げましょう（第1コリント15章5-7節）

私たちは人間の手によらない神の強力な武器をもって悪魔の要塞をやぶります（第2コリント10章4-5）

その時が訪れると、悪魔は1000年地の底に縛られ、その間イエスの主権のもと主に従う人々が世界を納める期間が訪れます。その後少しの間悪魔は再び地に解き放たれ、悪いものがその結果として悪魔とともに最終的に裁かれ地獄の炎に投げ込まれるのです（黙示録12章、20章）。

60. 神が存在することをどうして知ることができるのですか？

ローマ人への手紙の中で、パウロは二つの事例を挙げて神が確かに存在されること、人類に言い逃れの余地はないことを証しました。

神が存在する確証その1：神の創造物であるこの世界の存在。「世界が創造されてからこのかた、人々は、天地や、神がお造りになったすべてのものを見て、神の存在とその偉大な永遠の力をはっきり知っていました」（ローマ1章20節）。この世界に満ち溢れる被造物はその造り主が存在されることを証しています。

神が存在する確証その2：良心（善悪の観念）の存在。たとえ聖書を読んだことがなく、神を知らない人でも先天的に物事には善悪が存在することを知っており、理解しています。善の源は神ご自身です。「彼らは心の奥底では、正しいことと悪いことを区別できるからです。その心の中には、律法が書かれているのです。つまり、彼らの良心が、彼らを責めたり、また時には弁護したりするわけです」（ローマ2章14-15節）。

福音を聞いたことがある人が神の存在を確信するのに一番適した方法、それは神のすばらしさを実際に確かめることです。「さあ、主に信頼しましょう。そうすれば、どんなに神が恵み深いお方か知ることができます。神に信頼する人には恵みが雨のように降り注ぐことを、自分で確かめてごらんください。あなたが主のものとなっているのなら、恐れ敬いなさい。恐れ敬う者には、必要なものがいっぱい与えられます」（詩編34章8-9節）。それはとても単純なステップです。神が存在されること、そして神は真実なお方であることをまず、信じてみましょう。神がご自身を明らかにしてくださるように、（祈りを通して）お願いしましょう。あなたの心の（霊的な）目が開かれて、真実を悟ることができるよう求めれば、神は必ず答えてくださいます（エペソ1章18節）。

ヨハネの福音書を読むことをお勧めします。御言葉を通して神の愛があなたにはっきりと示され、恵みの奇跡を通してあなたが神をますます確信と喜びをもって知ることができますように。

61. 神は愛であり、全能なお方なら、なぜイエスを十字架の上で死なせなければならなかったのですか？

すべての罪には報い（罰則）が存在します。（罪とは？質問 58 参照）ローマ書 6 章 23 節「罪の支払う報酬は死です」とあるように、罪は死によってしか償うことができません。この世界に罪を犯さなかった人は存在せず、すべての人が罪の対価として「死ぬ」定めにあるのです（ローマ 3 章 23 節）。もし誰かが自身の罪の結果から免れたいと考えるなら、罪を償い、その罪によって要求される代償を支払う必要があります。神の御子、イエス・キリストは私たちの罪の代償を支払うために神が用意してくださった救済です。罪人が他の罪人の罪を背負うことはできません。しかし、イエスは人としての生涯の間、決して罪を犯しませんでした。イエスはこの世で唯一「罪が無く」、「死」に値しない存在だったのです。だからこそ、その聖い命をもって、私たちの罪を肩代わりすることができました。

「彼は私たちの悲しみを負い、私たちの嘆きをにないました。私たちは、彼がそんなに苦しむのは、罪を犯して神に罰せられているからだと思いました。しかし、私たちの罪のために傷つき、血を流したのです。彼は私たちに平安を与えようとして、進んで懲らしめを受けました。彼がむち打たれたので、私たちはいやされました。私たちは神の道を離れ、羊のようにさまよい出て、自分勝手な道を歩いてきました。しかし神は、私たち一人一人の罪を彼に負わせたのです。・・・人々は彼を裁判にかけ、刑場へ引き立てました。はたして、彼が死ぬのは自分たちの罪のためであり、身代わりに罰を受けて苦しんでいることを知っていた者が、その時代にいたでしょうか。彼は罪人扱いを受け、富む者の墓に葬られました。悪いことをしたわけでもなく、悪いことばを口にしたわけでもありません。彼を傷つけ、悲しみに満たすのは、主の計画だったのです。罪の赦しのためのささげ物として、そのたましいをささげるとき、彼は多くの子孫を見ることができます。彼は復活し、神の計画は彼の手によって成し遂げられます」（イザヤ 43 章 4-10）。

「あなたがたは、恵みにより、キリストを信じることによって救われたのです。しかも、そのキリストを信じることすらも、あなたがたから自発的に出たことではありません。それもまた、神からの賜物（贈り物）です。救いは、私たちの良い行いに対する報酬ではありません。ですから、だれ一人、それを誇ることはできません」（エペソ 2 章 8-9 節）。

悪魔の弱さは彼の傲慢と自己中心にあります。しかし、神の力は謙遜と愛です。神の愛と全能の力は死をも超越します。私たちを愛し、救うために命を差し出す神が他にいるのでしょうか。十字架の屈辱と苦痛を耐え忍び、死を克服し復活されたイエスこそ神の全能の力と愛の証しです。

「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人間と同じ

ようなかたちになり、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです」（ピリピ2章6－8節・新改訳）。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」（ヨハネ3章16節・新改訳）。

62. 聖霊とは何ですか？

聖霊は神の聖なる霊であり、同時に神そのものであられます。聖書の教える創造主、「神」は「三位一体の神」と称され、私たち人間の理解を超えた神の偉大さと真理がここに秘められています。神は唯一のお方でありつつ、同時に「聖霊なる神」、「イエス・キリスト」、「父なる神」といった三つの位格（人格・性質）を伴って存在されます。聖書の中でそれぞれ独立した存在として登場される聖霊、イエス、父なる神ですが、この三つの位格全員の本質は「神」なのです。三つの位格全員が全知全能であり、偏在的で永遠の存在であるという、神としての力と栄光を兼ね備えておられます。彼らは互いとの間に深い愛と信頼を基盤とした、完全な一致を常に保っておられるのです。そして、三位一体の神は一つの目的、御心、救いのご計画を調和の内に遂行されます。父なる神、子なる神、聖霊なる神は互いを完全に理解しあい、愛し合い、証ししあう一体の神なるお方です。

マタイの福音書3章16－17節は、この三位一体の神が同じ目的のために共に働かれている様子が顕著に表れている聖書箇所の一つです。「イエスが、バプテスマを受けて水から上がって来ると、突然天が開け、イエスは、神の御霊が鳩のようにご自分の上に下るのをごらんになりました。その時、天から声が聞こえました。『これこそ、わたしの愛する子。わたしは彼を心から喜んでいる』」。

「私たちは、イエスが神の子であると知っています。なぜなら、イエスがバプテスマ（洗礼）を受けられた時、そして、イエスが十字架の死を目前にされた時、天からの神の声があることを証言したからです。さらに、永遠に真実である聖霊も、そう証言しておられます。ですから、私たちには三つの証言があるわけです」（第1ヨハネ5章7節）。

私たちクリスチャンはイエス・キリストだけでなく、神であられる三つの位格全員と親しい交わりを持ちつつ信仰生活を送るよう救われました。

「だから、全世界に出て行って福音を宣べ伝え、すべての人々をわたしの弟子とし、彼らに、父と子と聖霊との名によってバプテスマ（洗礼）を授けなさい」（マタイ28章19節）。「私たちは実際に見聞きしたことを伝えているのです。それは、あなたがたが私たちと同じように、父なる神やそのひとり子イエス・キリストと交わることができる者となるためです」（第1ヨハネ1章3節）。「わたしは父に、もう一人の助け手を送っていただくようお願いいたします。その助け手は、いつもあなたがたと共におられます。その方は聖霊、すなわち、すべてを真理へと導いてくださる霊のことで

す」(ヨハネ14章16-17節)。「あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずです。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。・・・わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい」(ヨハネ14章7-11章抜粋・新改訳)。

聖霊は常にイエスの栄光を明らかにし、イエスは父なる神の栄光を表します。「真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです」(ヨハネ16章13-14節)。

聖霊なる神はどのようなお方なのか、三位一体の中でどのような役目を担っておられるのでしょうか。以下に聖霊に関して言及されている聖書箇所と聖霊の特徴的な働きをいくつかリストアップしてあります。参照されている箇所を自分で読んでみましょう。

人に罪を認めさせる(ヨハネ16章8節)

真理を照らし出す(ヨハネ16章13節)

霊のいのちを授ける(第1ペテロ3章18節、テトス3章5節)

御霊に仕えるものとしての教会奉仕を授ける(第2コリント3章16節)

神のことばを明らかにし、教える(第2ペテロ1章21節)

イエスの教えを思い出させる(ヨハネ14章26節)

命の水(黙示録22章17節)

カウンセラー・助言者(ヨハネ14章15-21節)

信仰者のうちに住まれる(ヨハネ14章17節、第1コリント6章19-20節)

教会奉仕のために必要な力(使徒1章8節)

悪霊を打ち負かす(マタイ12章28節、ヨハネ4章30節)

祈りの助け、とりなしをしてくださる(ローマ8章26節)

異言の賜物(使徒2章3-4節)

信仰者の言動を導く(使徒10章19-20節)

クリスチャン指導者の選別を見守り導かれる(使徒13章2節)

次の宣教地を定められる(使徒16節6節)

神の子とされた救いの確信を下さる（ローマ8章16節）

信仰生活の励まし（使徒9章31節）

救いによる自由と解放（第2コリント3章17節）

私たちを神への賛美、愛と喜びで満たされる（エペソ5章18節、ローマ15章13節）

「どうか、主イエス・キリストの恵みが、あなたがた一同にありますように。神の愛と聖霊との交わりが、あなたがたと共にありますように」（第2コリント13章14節）。

63. 「三位一体」（トリニティ）とはなんですか？

実は、聖書の中に「三位一体」といった言葉は存在しません。しかし、聖書の中には神がご自身を複数形で称されている場面が幾度も登場します。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」（創世記1章26節・新改訳）。「神は・・・こうわれました。『人間は、われわれと同じように、善悪の区別がわかるようになってしまった。』」（創世記3章22節）。このように、聖書を読めば「神は唯一のお方」であること、また同時に「父」、「子（ことば）」、「霊」として存在されることがわかります。創世記からヨハネの黙示録に現れる神は三つの位格（人格・ご性質）をお持ちでありつつ、唯一無二（一体）の神であることは明らかです。この真理を私たちは「三位一体」と表現します。

「イエスがバプテスマ（洗礼）を受けられた時、そして、イエスが十字架の死を目前にされた時、天からの神の声そのことを証言したからです。さらに、永遠に真実である聖霊も、そう証言しておられます。ですから、私たちには三つの証言があるわけです」（第一ヨハネ5章7節—強調独自）。参照：詩編33章4節、イザヤ40章8節、詩編51章11-13、イザヤ63章10節

すべて存在の源であり、天の父なる神。神の独り子、神の「ことば」であるイエス・キリスト（ヨハネ1章）。真理の御霊、神なる聖霊（創世記1章2、ヨハネ14章25-26節）。聖書の中でそれぞれ独立した存在として登場される三位ですが、全員が「神」としての本質をお持ちです。三位一体の神で在られる聖書の神は、互いとの間に完全な調和を常に保っておられ、一つの目的、御心、救いのご計画を共に遂行されるのです。

初代教会の時代、神の唯一性を強調しイエスや聖霊の神聖を否定した Unitarianism 「ユニテリアン主義」や三位の神はそれぞれ別々の神であるとし、神の唯一性を否定した Tri-theism 「三神論」といった異端の信仰が広がりつつありました。そこでクリスチャンたちは聖書の神と自らの信仰を正しく定義し、表現する必要に迫られたのです。

そして、紀元356年に Athanasian Creed 「アタナシオス信条」が確立されました。

「・・・公同の信仰とは、唯一の神を三位において、三位を一体においてあがめ、位格を混同せず、本質を分離しない信仰である。父の位格、子の位格、聖霊の位格はそれぞれ異なる。しかし、父と子と聖霊の神性は一、栄光は等しく、尊厳は永遠。子と聖霊は父と同じである。父は造られたものでなく、子も造られたものでなく、聖霊も造られたものではない。父は測り知れず、子も測り知れず、聖霊も測り知れない。父は永遠、子も永遠、聖霊も永遠。しかも永遠なものは、三ではなく一。造られないものが三あるのではないように、測り知れないものも三あるのではなく、造られないもの、測り知れないものはただ一。父は全能、子も全能、聖霊も全能。しかも全能のものは三ではなく一。このように、父は神、子も神、聖霊も神。しかも、神は三ではなく一。このように、父は主、子も主、聖霊も主。しかも主は三ではなく一。キリスト教の真理によって、それぞれの位格を、個別に神であり、主であると告白することが求められており、三神三主について語ることを、公同の信仰によって禁じられているからである。父はなにものから成ったのでも、造られたのでも、生れたのでもない。子は父からのみ生まれたのであって、成ったのでも、造られたのでもない。聖霊は父と子から出るものであって、成ったのでも、造られたのでも、生まれたのでもない。だから、父は一であって三ではなく、子も一であって三ではなく、聖霊も一であって三ではない。また、この三位一体においては、どれが先でどれが後、どれが大でどれが小ということはない。むしろこの三位格はみな、ともに永遠で、同等である。さきに述べたとおり、すべてを通じて、三位が一体において、一体が三位においてあがめられるのである。それゆえ、救われたいと願う者はみな、三位一体について、そのように信じなければならぬ。・・・」。(東日本福音ルーテル教会ウェブサイトより抜粋 <http://www.wjelc.or.jp/office/credo/athanasius.htm>)

神は私たち人間の論理や説明に納まるお方ではありません。神は人間の頭脳やことばを超越されるお方です。しかし、私たちは信仰によって「3=1」「1=3」という神の真理を受け入れ、“Tri”：三位、“unity”：一致、調和、“Trinity”（トリニティ）「三位一体」という表現を用いて聖書の神を称するようになったのです。

64. なぜ聖書は神を「父」と呼ぶのですか？

聖書に描かれている神は、ご自身が創造された世界に積極的に関わり、被造物との交流を望まれる神です。神は世界とそこに満ち溢れるすべてのものに心を配り、育み、慈しんでくださいます。聖書を通して明らかにされる神は愛する我が子の必要なものを満たし、世話をする父親の姿そのものです。

また、ローマ人への手紙8章14-17節にはこう書かれています。「神の御霊によって導かれる者はだれでも、神の子どもだからです。ですから私たちは、奴隷のようにいつもびくびくする必要はありません。神の家族の中に子どもとしてあたたかく迎え入れられたのですから、実の子どもらしくふるまい、神を『お父さん』と呼べるのです。というのは、御霊が私たちに、あなたがたはほんとうに神の子どもであると語ってくださるからです。私たちは神の子ども

もですから、神の相続財産を受けるのです。神がひとり子イエスにお与えになったものは、今では私たちのものでもあるのです」。

65. 神は私の必要なものを満たしてくれるのですか？

神は天におられるあなたのお父さんです。そして天の父はあなたを深く愛しておられます。神はあなたのことをすべてご存じです。あなたの人生で必要なもの、霊的で必要なもの、肉体的に必要なもの、精神的、感情的に必要なものをすべてを理解し、満たすことができるのは父なる神以外ありえません。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。戸をたたきなさい。そうすれば開けてもらえます。求める人はだれでも与えられ、捜す人はだれでも見つけ出します。戸をたたきさえすれば開けてもらえるのです。パンをねだる子どもに、石ころを与える父親がいるのでしょうか。『魚が食べたい』と言う子どもに、蛇を与える父親がいるのでしょうか。いるわけがありません。罪深いあなたがたであっても、自分の子どもには良いものを与えたいと思うのです。それならなおのこと、あなたがたの天の父が、求める者に良いものを下さらないはずがあるのでしょうか」（マタイ7章7-11節）。

66. どの宗教も根本的なところは同じだと思うのですが、私は正しいですか？

それは違います。ほとんどの場合、各宗教の間には根本的な違いがあり、その違いは妥協できるレベルのものではありません。残念ながらすべての宗教が調和を保ち、一致できると考えるのは誤りです。そのように主張する人はそれぞれの宗教の表面的な部分しか理解できていないと言えるでしょう。そのような意見がどんなに先進的に聞こえても耳を傾けてはいけません。ある世界的な宗教の一派はイエス・キリストが神の御子であることを否定し、その神性も復活も信じません。このような信仰に対してパウロはどう応答したのでしょうか。「もしキリストが復活しなかったのなら、信仰はむなしく、あなたがたは今も罪の中にいるのです。また、すでに死んだクリスチャンは、みな滅んでしまったことになります。もしクリスチャンであることが、この世の生活でしか価値がないのなら、私たちほどみじめな者はありません」。第一コリントへの手紙15章を読んでみましょう。

聖書は全知全能の神、創造主お一人を礼拝するように教えます。偶像礼拝を忌み嫌い、嫉妬される聖書の神は、人々が他の「神々」や「偶像」を礼拝することを厳しく禁じられます（出エジプト記20章、申命記6章4節）。世界的にも勢力の大きいある宗教では数えきれないほど多くの神々を崇めています。その宗教の信者は自分の状況や願いに適した「神」をその都度選ばなければなりません。聖書の神はいつどんな時も、すべての状況において神と人の間をとりなしてくださる代弁者を備えてくださいました。イエス・キリストです。

巷では「どの宗教も基本的には『神』（超越した存在・体験）を通して救い（天国・極楽・平安・幸せ）を得るもの」といった漠然とした宗教に対する考えが聞かれます。しかしこれも、すべての宗教

に当てはまるものではありません。世界には永遠の天国も、神も、救いも存在しない宗教がいくつも存在します。

聖書の神は人間の知恵や想像力の産物ではありません。神の啓示によってのみ私たちに明らかにされた神です。最高権威者でおられ、世界の創造主なる神は人類にご自身が何者であるかお示しになり、自ら救いの御業を成し遂げてくださいました。救いの御業は、神の啓示を受け入れ信じるものすべてに与えられる賜物です。しかし、多くの宗教は人々に善行を積み「救い」を「稼ぐ」または「勝ち取る」ように教えます。中にはその人の善行に応じて来世が左右される輪廻転生を信じている人もいるかもしれません。聖書は人間の努力で魂の救いを得ることは不可能だと教えます。神の他に私たちに救いを与えることができる存在や「善行」は存在しないのです。救いは神の御子イエス・キリストの犠牲によってもたらされ、信仰を通して与えられる無償の贈りものです。私たちがそれを自ら達成したり、稼いだりすることはできません。

これらの例えから見て取れるように、これほどまでに正反対の信仰同士が共存することはできません。真の救いをお与えくださる真の神を信じ求め続けましょう。

67. どの宗教を信じようが「信仰」することが重要なことから、宗教は関係ないと思うのですが、私は正しいですか？

あなたが真実を知っていることはとても重要です。そして真実は誤った考えや嘘からあなたを解放します。あなたの人生に真の自由と希望をもたらします。聖書の教えは真実（真理）と魂の救いに関してとてもはっきりとした立場をとっています。真理は神とともにあり、イエス・キリストを救い主として受け入れ、信じる以外に救いの道はないと教えているのです。イエスを否定する人の結末は裁きと永遠の死です。赦しと救いを選ぶか、死と地獄を選ぶか。これほど極端に結果の違う選択肢を前にして、無償の救いを拒み、後者を選ぶでしょうか。誤った信仰の先に破滅が待っているとはっきり示されていても、関係ないのでしょうか。「心の中で『神などいない』と言う者は愚かです。」とダビデ王は詠っています（詩編14章1節）。

イエスはマタイの福音書14章でこのように教えました。「狭い門を通らなければ、天の国に入ることはできません。人を滅びに導く道は広く、多くの人がある楽な道を進み、広い門から入って行きます。しかし、いのちに至る門は小さく、その道は狭いので、ほんのわずかな人しか見つけることができません。偽教師たちに気をつけなさい。彼らは羊の毛皮をかぶった狼だから、あなたがたを引き裂いてしまうでしょう。彼らの行いを見て、正体を見抜きなさい。ちょうど木を見分けるように。実を見れば、何の木かはっきりわかります。ぶどうといばら、いちじくとあざみとを見まちがえることなどありえません。実を食べてみれば、どんな木かすぐにわかります。おいしい実をつける木が、まずい実をつけるはずはないし、まずい実をつける木が、おいしい実をつけるはずもありません。まずい実しかつけない木は、結局は切り倒され、焼き捨てられてしまい

ます。木でも人でも、それを見分けるには、どんな実を結ぶかを見ればよいのです」（13-20節）。この教えを宗教とその信者に当てはめてみるといいでしょう。彼らの行いの実を通して、どの信仰に真の救いと希望、真実があるのか見定めることができるはずで

68. 昔から毎日の習慣としてお祈りをする時間を持っていましたが、クリスチャンとしてその習慣は続けるべきですか？

祈りの習慣があることは大変良いことです。しかしクリスチャンとしての祈りで大切なのは回数や長さ、祈るタイミングではなく、祈りを通して培われる神との関係です。祈りの目的は神との対話なのです。

「どんな時にも祈りなさい。どんなことでも、聖霊の考えにそって神にひたすら願い求めなさい。各地に散っているすべてのクリスチャンのために、熱心に祈り続けなさい」（エペソ6章18節）。

「いつも祈りに励みなさい」（第1テサロニケ5章17節）。

「・・・怒ったり恨みをいだいたりせず、どこでも、きよい手を上げて祈りなさい」（第1テモテ2章8節抜粋）。祈りを通して私たちは常に神と対話し、関係を深めていくことができます。だからこそ私たちは「いつも」「どんな時にも」祈るべきです。決まった日時やイベントに縛られる必要はありません。だからと言ってそのようなときに祈ってはいけないわけでもありません。神はいつも私たちの祈りに喜んで耳を傾けてくださっています。だからこそ私たちはいつでもどこでも、どんな時も「アバ、父よ」と神に語り掛けることができます。これこそがクリスチャンの祈りのすばらしさです。神が与えてくださった祝福に感謝しつつ祈り続けましょう。

69. 聖書箇所を暗記して引用しつつ祈るべきでしょうか？

御言葉を暗記するのはとても聖書的であり、あなたにとってよい鍛錬となります。神のことばを心に蓄えよという聖書の教えを実行することだからです（申命記11章18節、詩編119章11節）。私たちを霊的に成長させ、敵の攻撃をかわすのに大変有効な聖書箇所が沢山あります。これらの聖句を暗記し、祈りの中で引用するとよいでしょう。

第1ヨハネ1章9節：日々神の赦しを受け取り、聖い生活を求め、罪深い思いや行動から遠ざかるよう励ましてくれます。

ローマ8章：神の霊に頼って生きることを教えてくれる重要な章です。暗唱聖句として8章を丸ごと覚えることをお勧めします。

コロサイ3章16節：

深く親密な祈りとは神との会話としての祈りです。一方的な祈りは会話ではありません。私たちは祈りをもって神に話しかけ、神からの返答に耳を傾けます。心を静め神からの応答を待つ時に、神は私

たちの心や霊に語り返してくださいます。祈りの中での聖句暗唱は対話とは言えないかもしれません。しかし、御言葉には神の素晴らしい祝福の約束が溢れています。私たちが御国を相続するものとして神の約束を宣言することを神は喜んでくださいます。「『わたしに願い求めよ。そうすれば、世界のすべての国を授けよう。・・・』」（詩編2章8節）。「神は疲れた者に力を、弱い者に活力を与えます。若者も疲れ果て、若い男も限界に達します。しかし、主を待ち望む者は新しい力がみなぎり、わしのように翼を張って舞い上がることができます。どれだけ走っても疲れず、どんなに歩いても息切れしません」（イザヤ40章29-31節）。暗唱聖句を通して神に賛美をささげることもできます。詩編には以下のような賛美に適した聖句が沢山ありますので、ぜひ祈りに用いるとよいでしょう。

詩編3章3-4節

詩編4章3節

詩編8章全体

公の場やイベントなどで祈りをささげる機会がある時は、事前にその特別な場でどのように何を祈るべきか、神に祈り尋ねることをお勧めします。神がそこに集う人々と分かち合いたいと願われる御言葉を示してくださるかもしれません。あらかじめあなたの祈りを書き出し、暗記して祈ることも問題ありません。聖霊があなたの祈りを導き、とりなしてくださることを忘れず、時には御言葉を引用し、神への感謝と賛美をもって祈りましょう。

70. 仏教、イスラム教、ヒンズー教の人も天国にいますか？

世界にはクリスチャンであることを隠しながらイエス・キリストを信じている人々が沢山います。その人が暮らしている国や地域によって、表立ったキリスト教への「改宗」が禁じられていたり、信仰によって激しい迫害と命の危険にさらされる場合があります。そのような大変厳しい状況下でも、限られた情報やイエス・キリストの啓示と証しを通して人々は救われているのです。これまでも沢山のヒンズー教徒やイスラム教徒の人々が表面上は彼らの宗教的文化、習慣に従いつつも、イエスを信じてきました。その人が本当にイエスを救い主と信じるならば、その人は神の御国の一員です。イエスは「もう一度生まれ直さなければ、絶対に神の国に入れません」とおっしゃいました（ヨハネ3章3節）。私たちに新しいいのちを授けてくださるのは聖霊です。あなたが、生まれや住んでいる環境により仏教徒、イスラム教徒、ヒンズー教徒だとしても、イエスを主と信じ告白し、聖霊によってもう一度生まれ直したならば、神の御国はあなたに開かれています（第2コリント5章17節）。しかし、救いは神の深い御心の内にあり、人の心をすべてご存じなのは神お一人です。ある人が仏教徒という肩書があるゆえに「救われていない」だとか、その人はクリスチャンと名乗っているから必ず天国に行くなどと私たちが裁くべきではありません。「終わりの時代には・・・世界各地から多くの民が、主を礼拝しに詰めかけま

す」(イザヤ2章2-4節抜粋)。神は世界中すべての国、民族の人々を等しく愛され、皆に救いの道を差し出してくださっていることを心に留めておきましょう。今は違う宗教に属している家族友人の救いを祈り求め続けましょう。

J 一偉大な人物や他の宗教

71. 歴史上の偉大な人物たちが残した知恵や明言を聖書のように学び覚えるべきでしょうか？

神様からのメッセージをいただき、人類が神様の方法を理解するのに大きく貢献した信仰の偉人たちのことばを読んだり、研究するのはとても有益です。

しかし、完璧な人というのはいないので、彼らの言葉が私たちにとって益になるのは、それが神の言葉に一致している場合に限りません。

パウロはそのためのガイドラインとして、ピリピ人への手紙の中で次のように言っています。「真実なこと、良いこと、正しいことに注目しなさい。きよいこと、愛すべきことについて思いめぐらし、他の人の長所に目をとめなさい。神を喜び、賛美することばかりを考えなさい。私から学んだこと、その行動から教えられたことがあれば、実行しなさい。そうすれば、平和の神が共にいてくださいます。」(ピリピ4章8-9節)

聖書が多くの異なる人によって書かれたことは事実ですが、聖書の予言はどれひとつ個人的な解釈で書かれたものではありません。むしろ、神に従う人々が聖霊に促されて記述したものです。(第2ペテロ1章20-21節)。

聖書をよく理解し、それを注意深く学び続けるようにしましょう。

72. 偶像に供えた後で取りおろしてきた食べ物をいただいたら、私たちはそれを食べるべきでしょうか？

「私が言いたいのは、彼らのささげる物は、神にではなく、悪霊にささげられたものであるということです。あなたがたの中から、偶像への供え物を異教徒たちと共に食べたりして、悪霊と一つになる人など一人も出てほしくありません。主の食卓の杯と悪霊の食卓の杯の両方を飲むことはできません。同じように、主の食卓のパンと悪霊の食卓のパンを、両方とも食べるなどできません。いったい、あなたがたは主を怒らせようとしているのですか。自分が主よりも強いとでも言うのですか。

もし食べたければ、偶像への供え物を食べても一向にかまいません。それを食べても、神の律法には反しません。しかし、律法に反しないことでも最善とは限らず、また有益とも限りません。自分のことばかり考えてはいけません。他の人を思いやり、何がその人にとって最善か、よく考えなさい。こうすればよいのです。市場で売られている肉は、どれでも自由に食べなさい。それが偶像に供

えられた物かどうか、いちいち尋ねなくてよいのです。そうすれば良心を傷つけることもないでしょう。地上にある良いものはみな、主のものであり、あなたがたを楽しませるためにあるのです。

クリスチャンでない人から食事に招待された場合、出される物は何でも食べなさい。それについて、いちいち尋ねてはいけません。尋ねなければ、偶像に供えられた物かどうかわからないし、食べて良心が傷つく心配もありません。しかし、もし、『この肉は偶像に供えられたものです』と注意してくれる人がいたら、その人のために、また他の人の良心のために、出された肉を食べるのはやめなさい。この場合、肉についての自分の判断よりも、相手の考えが大切なのです。『なぜ他人の考えに支配されたり、束縛されたりしなければならないのですか。神に感謝してそれを食べることができれば、他人からとやかく言われることはないではありませんか』と言うかもしれません。しかし、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」（第1コリント 10章 20-31節）

「『自分がしようとしていることは悪いことだ』と思いつつしている人は、してはなりません。悪いと思うことをするのは、すべて罪です。」（ローマ 14章 23節）

使徒 15章 13-20節で、ヤコブは新しく生まれた異邦人の信者たちに偶像に供えた肉は食べないようにと指示しました。

73. クリスチャンは先祖を礼拝するべきでしょうか？

使徒 14章 8-18節で、足の不自由な人の癒しを見て、パウロとバルナバを崇拝しようとした群衆に対し、そんな行為を非難しました。

神は私たちに他の神々を信じないように命じられました。（出エジプト記 20章 3節）。私たちは被造物を礼拝するのではなく、創造主を崇拝すべきです（ローマ 1章 23節）。

エレミヤ 19章 13説では、自分たちの家の屋上で他の神々に香を焚いた（礼拝した）人々に、神がひどい裁きを下されると言われています。

第1ペテロ 1章 17-19節では、先祖伝来のむなしい生き方に倣って生きようとする人々に対して、次のように語っています。

「あなたがたが祈りをささげる天の父なる神は、人の行いをすべて、正しく公平にさばかれます。ですから天に行くその日まで、主を恐れ、慎み深く生活しなさい。神は、あなたがたの先祖が天国への道を外れ、むなしい努力を重ねてきた生き方からあなたがたを救い出すために、身の代金を払ってくださいました。それは、金や銀のような朽ちる物ではなく、一点の罪もしみもない神の小羊、キリストの尊い血によって支払われたのです。」

申命記 18 v 11 では、死者との交霊による占いや死者にうかがいを立てることを禁じており、それを実践する人は主の前から追放されると言っています。

しかし、私たちは両親や祖父母や祖先を尊敬すべきですが、礼拝するのではなく、彼らの人生に敬意を払い、祖先である事実を尊重すべきです。私たちは祖先の名前と容貌を引き継いでいるのです。聖書は次のように語っています。

「『あなたの父と母とを敬え。』これは、『十戒』の中で対人関係について言われた第一の戒めで、その後に約束があります。つまり、『父母を敬うなら、あなたは幸せになり、長生きする』（出エジプト 20・12）という約束です。」（エペソ 6章 2-3節）

K一死、天国、永遠のいのち

74. クリスマンは死んだらすぐ天国に行くのでしょうか？

イエスは彼の隣で十字架にかかりながら、悔い改め、イエスを信じた泥棒に「今日わたし(イエス)と共にパラダイス(天国)に行く」と約束しました。（ルカ 23章 43節）。

パウロは自分が死ぬことは、イエスと一緒に住むことになるので素晴らしいと2度も語りました。（第2コリント 5章 8節、ピリピ 1章 23-25節）。

イエスは裏切られた夜に弟子たちを慰めました

「あなたがたは、どんなことがあっても、心配したりあわてたりしてはいけません。神を信じ、またわたしを信じなさい。父の住んでおられる所には、家がたくさんあります。もしなかったら、はっきり言っておいたでしょう。わたしは、あなたがたを迎える家を準備しに行くのです。すっきり準備ができれば迎えに来ます。わたしがいる所に、あなたがたもいられるようにするためです。」（ヨハネ 14章 1-3節）

75. ある人がキリストを救い主として受け入れることなく死んだ場合、その人にはもう一度さばきを免れる機会はあるのでしょうか？

人間には、一度だけ死んで、その後、その人生についてさばきを受けることが定められています。イエスキリストが神の子であることを信じない者は、すでにさばかれています。それは、すべての人が罪を犯したので、神様が私たちのために用意された素晴らしい計画からほど遠い存在となっているからです。しかし、イエスキリストを信じた人はさばきの時にキリストを通して無償のゆるし与えられます。（ヨハネ 3章 18節、ローマ 3章 23節、ヘブル 9章 27節参照）

正義という種をまきましょう。そうすれば、神の愛という実を刈り取ります。

堅くなった心を耕しましょう。今は主を求める時なのです。そうすることで、イエスキリストを通して神の正義が私たちの内に宿ります。（ホセア 10 章 12 節参照）

今が、主イエス・キリストを受け入れることのできる時なのです。今が、救いの時なのです。

死んだ後ではありません。

L. キリストの再臨

76. 大患難時代に人々は救いを見出すでしょうか？

見出します。ヨハネ黙示録 7 章 13-17 節には以下のように書かれています。

「その時、二十四人の長老の一人が、私に尋ねました。『この白い衣の人たちがだれだか、わかりますか。どこから来たか知っていますか。』 『わかりません。どうか教えてください』と答えると、彼は言いました。『あの人たちは激しい迫害をくぐり抜け、小羊の血で、その衣を洗って白くした人たちです。だから、こうして神の王座の前において、昼も夜も、神殿で奉仕しているのです。そして、王座に座っておられる方によって、安全にかくまわれています。彼らはもう二度と飢えることも、渇くこともありません。灼熱の太陽からも守られています。それは、王座の正面に立たれる小羊が、羊飼いとしてみらるるを養い、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また神は、彼らの目からあふれる涙を、すっかりぬぐい取ってくださるのです。』」

これが大患難時代に救われる人々についての記録なのです！

77. ヨハネはどのようにして、黙示録に書いてあるような幻（ビジョン）を得ることができたのでしょうか？

ヨハネは主の日(日曜日)に神を礼拝している時に、聖霊に導かれて終わりの時についての幻を与えられました。そして、ラツパのような大きな声が響き渡り、ヨハネの見た幻の意味を説明してくれました。

幻（ビジョン）とは人が眼で見たものを絵画的な方法で提示するものですが、人が現実に見たものとは異なり、ただ絵画的な形で表現されたものです。これはヨハネ黙示録 1 章 9-12 節に記録されています。他の使徒たちも様々な幻を見ました。ペテロ、ヤコブ、ヨハネの見た幻（マタイ 17 章 9 節）、パウロの見た幻などがあります（使徒 16 章 9 節）。

78. キリストの再臨は本当にあるのでしょうか？

イエスは最後の晩餐の席で、「すっかり準備ができたなら迎えに来ます。わたしがいる所に、あなたがたもいられるようにするためです。」（ヨハネ 14 章 1-3 節参照）と言われました。

ただ、その時がいつ、どんな時期であるかは誰も知りません。主の日は泥棒が夜やってくるように突然やってくるからです。（第1テサロニケ5章1-2節）

「主の日は、次の二つの現象が起こるまでは実現しないからです。まず、世をあげて神に逆らう時代が来ます。それから、反逆者である反キリスト、すなわち滅びの子が現れます。彼は、神と名のつくものにはことごとく反抗し、また、礼拝の対象をすべて打ちこわします。そして神殿に入って神の座につき、自分こそ神だと宣言します。... 時が来れば、いよいよこの反キリストが現れることとなりますが、主イエスが来られ、御口の息と輝きによって、彼を滅ぼしてしまわれます。この反キリストは悪魔の手先であり、悪魔のあらゆる力を与えられてやって来ます。不思議なわざを見せては人々をだまし、力ある奇跡を行う者であるかのように見せかけるのです。」（第2テサロニケ2章3-10節主はヨハネ黙示録16章15節でこう言われました。「用心していなさい。わたしは盗人のように、思いがけない時に来ます。目を覚まして待っている人は幸いです。そのような人は、着物をきちんと着ているので、裸で外を歩くような恥はかきません。」）

使徒1章11節、ルカ21章27節、マタイ24章27節、26章64節も参照してください。

M. 聖書一神のことば

79. 聖書が間違いないとどう証明できるのですか？

聖書が間違いないことは、主に次の3つのことから確認することができます。

歴史的に正確。歴史は聖書が歴史的に正確な書物であることを証明しています。例えば、「死海写本」、ペドウィンの羊飼いムハンマド・エッ・ディーブが1947年にヨルダン川西岸のクムラン地区の岩壁の割れ目から発見した巻物。イザヤ書の写本を含む。文書の成立は内容および書体の分析と放射性炭素年代測定、質量分析法などから紀元前250年ごろから紀元70年の間と考えられています。ヘブル語のテキストには66の章が含まれており、その内容は今日のテキストと同じでした。

預言の成就。旧約聖書には救い主の誕生、生、死、復活についての予言が333ありますが、すべて、イエス・キリストの生涯の中で成就しました。たとえば、上記で出てきたイザヤ書はイエス・キリストの誕生前に存在していたことが判明していますが、イエス・キリストの生涯について多くの予言をしています。イザヤ書9章、49章、50章、52章、53章、55章、61章などを参照してみてください。

聖書の力。聖書は人類に宛てた神のことばを記録しています。私たち人類が神のことばを信仰をもって受け取り、人生に適用するならば、それは力強い結果を生み出します。救いは神の言葉を通して人類に伝えられ、受け取られます（ヨハネ3章16節）。勝利は神の

ことばの中にあります（ヤコブ 4 章 7 節）。罪の赦し（第 1 ヨハネ 1 章 9 節）。主のことばは永遠に存続します（第 1 ペテロ 1 章 25 節）。

80. 聖書は人間が書いたものではないのですか？

「神の靈感によって書かれた聖書は、何が真理であり、何が悪であるかをよく教えてください。また、私たちの生活をまっすぐにし、正しいことを行う力を与えてくれます。」（第 2 テモテ 3 章 16 節）

「なぜなら、聖書にある預言のことばは、預言者がかってに考え出したものではないからです。それは、これら神を敬う人の心に住まれる聖霊がお授けになった、混じりけのない神からのことばなのです。」（第 2 ペテロ 1 章 21 節）ヨハネ黙示録 1 章 10 節で、ヨハネは主の日（日曜日）に神を礼拝している時に、聖霊に導かれて終わりの時についての幻を与えられました。

聖書は 40 人の異なる筆者によって書かれた 66 巻の本の編纂物です。66 冊の本には多くの文学ジャンルが含まれています。歴史、詩、預言、歌、福音書、教会に宛てた書簡です。聖書はまとめられて、正典と呼ばれています。初期の教父たち（教会の指導者）は聖書の各巻の内容を非常に熱心に研究しました、そして 66 巻の正典は神から与えられた権威ある本であると合意しました。

彼らはこの正典をまとめるにあたって、神からの靈感に完全に依存してこの編纂に当たったと強く主張しました。

81. 聖書に記されている歴史的史実は信頼できるものなのですか？

はい、聖書は歴史的に正確です。その大部分は最近の考古学的発見によりその正確さが確認されています。以下のリストは、考古学により実証された事柄や場所を表しています。

1. 大洪水。紀元前 4000 年頃の砂漠の砂の下で発見された壊滅的な洪水の痕跡。
2. ノアの箱舟。1955 年にフランス人のフェルナンドナバラにより発見された、アララト山上の氷に埋もれた大きな船の梁の木材。この木材は少なくとも 4000 年以上前のものでした。
3. マリ王国。1933 年にユーフラテス川のほとりで発掘されたアブラハムの時代の王国。
4. ロトの妻とソドムのさばき。ソドム山にある塩の柱、死海とプレート断層、死海に水没した森。
5. ヨセフがエジプトで高官ポティファルに仕えていた時に起こった 7 年間の飢饉の詳細。

6. エジプトの王子の墓の中で発見された、奴隷労働や疫病や葦の茂みの中で見つけられた引率者 MS（モーゼ）の物語。

7. 再発見されたソロモン王の銅鉱山。さらに、メギドで発掘されたソロモン王の厩舎。

死海写本 — 1947年にクムラン洞窟で発見。

82. どうしたら聖書を理解できますか？

聖書は聖霊の靈感と導きの下で書かれました。（黙示録 1 章 10 節）。聖書は私たちが霊的な真理を理解し、永遠のいのちを持っていることを知り、神の御子を信じることができるようにと私たちに与えられました。（1 ヨハネ 5 章 13 節）。

聖書は聖霊の靈感を受けて書かれたので、その意味を完全に理解するためには聖霊の助けが必要です。神についての真の理解は霊的な真心からの礼拝をする人々に与えられるのです。

（ヨハネ 4 章 24 節）。

あなたがたは聖霊を授かっています。聖霊が心のうちに生きておられます。ですから、何が正しいかを判断するのに、だれからも教えてもらう必要はありません。聖霊がすべてを指示してくださるからです。（第 1 ヨハネ 2 章 27 節）。

神が何を望んでおられるか知りたいなら、遠慮なく、直接尋ねなさい。神は喜んで教えてくださいます。（ヤコブ 1 章 5 節）。

聖書を理解するのに役立つツールとして「聖書語句辞典」、「聖書歴史地図」などがあります。また、聖書の解釈の助けとなる「注解書」もあります。

これらはキリスト教書店やインターネットで購入できます。

83. 聖書の原語から日本語に翻訳される際に内容や言葉の意味が変わってしまったり、または訳者により意図的に操作されているのではありませんか？

数世紀にわたって聖書の主要な翻訳に従事してきた人々は神から与えられた責任を十分に理解して、聖霊の指導と導きの下で神から知恵と理解が与えられるように熱心に求めてきた人たちです。これらの翻訳は無数の学者、教授、学生たちによって研究されてきましたが、いくつかの小さな点を除いてはそれによって翻訳が変更されることはありませんでした。

聖書の言語の意味を確認するために、ギリシャ語やヘブル語で聖句を確認することもできます。原語と比較できる聖書語句辞典や詳訳聖書の助けを借りて原語の翻訳を試みることもできます。こうして、間違いさがしではありませんが、聖書の原語を調べてその聖句のより完全な意味を探ることもできます。これはきっとチャレンジ一杯の楽しい学びになるでしょう。

1947年のクムランでの死海文書の発見は、旧約聖書の多くの本（イザヤ書など）が2000年以上にわたり書写と翻訳が繰り返し替えられても、その意味が変わらなかったことを確認させてくれます。

ユダヤ人がどんなに細かいところまで気を配って聖書を書写し、保存したかを調べると、旧約聖書の歴史的な正確さがさらに理解できます。最後にイザヤ40章8節を見ましょう。

「草はしおれ、花はしぼむ。しかし神のおことばは、いつまでもすたれることがない。」

N. 未来について

84. ある人たちはどうしてこれから起こることを予言できるのでしょうか？

今日の世界では、将来の出来事の詳細を予言する方法には2つの傾向があるようです。1つは、神の霊によるもので、予言と呼ばす。もう一つは、サタンの影響によるもので、偽の予言や占いと呼ばれるものです。

予言。キリストは彼のからだである教会の中に予言のたまものを持つ人々を置かれました（エペソ4章11節）。この人たちは地上で神が行おうとしておられることを前もって伝えます。また、彼らは聖書のことばに添っていて、神を愛し礼拝する人々と心をひとつにしています。

偽の予言や占い。サタンはいろいろな不思議なわざや嘘で人々をだまそうと励んでいます。また、未来に対する予測を与えてサタンの信奉者を誘惑し続けてきました。あるものは実現することもあります。他は実現せず、嘘の予言でした。（第2テサロニケ2章）。これらの予測は通常、聖書の教えに反対し、聞く人に恐怖を与え、束縛するようになります。聖書はクリスチャンに対し、このような偽の予言や占いと関わりを持つことを厳しく禁じています。（申命記18章9-12節）。

聖霊はクリスチャンに真の予言と偽の予言を見分ける力を与えてくれます。このような賜物を求めて聖霊にお祈りしましょう。

O. 聖書は結婚についてどのように教えていますか？

85. どうしてクリスチャンはセックスは結婚後持つようにと主張するのですか？

教会はキリストの花嫁と呼ばれています。

「七人の天使の一人が来て、私に言いました。『ついて来なさい。小羊の妻となる花嫁を紹介しましょう。』」（ヨハネ黙示録21章9節）

「聖霊と花嫁は、『来てください』と言っています。これを聞く人々は、同じように、『来てください』と言いなさい。渴いている人（求めている人）は、だれでも来なさい。そして、いのちの水をただで受けなさい。」（ヨハネ黙示録 22 章 17 節）

純粋さと結婚のイメージは、神と神にあがなわれた人々（クリスチャン）との関係に不可欠な要素です。キリストが再臨されるとき、彼は彼の花嫁（教会）のために地上に来られます。彼の花嫁はカルバリ丘の十字架でなされたキリストのあがないの祝福を完全に受け入れて、キリストの血潮で洗い清められた信仰者の群れです。神はこのイメージを用いて私たちと神との関係における忠実さを強調されています。私たちが礼拝すべきお方はこの神だけで、他の神々を礼拝してはいけません。同様に親密な結婚関係は私たちの神との関係を反映するものとなるべきです。第 1 コリント 7 章をお読みになって、パウロの教えにある結婚関係における純粋性と排他性について学んでください。黙示録の中では、この地球と人類を破壊しようとする全ての悪は売春婦や地上の邪悪な者との性的不道徳としてとして描かれています。この邪悪で不道徳な人々と悪魔的存在は最終的には破滅させられます。ヨハネ黙示録 12 章と 17 章を参照してみてください。神は聖なる神なのでそのような邪悪なやり方が存続するのをお許しにならず、義の王国を地上に君臨させようとしておられます。

クリスチャンの結婚前の性的純粋さへのこだわりは、キリストの花嫁である教会が純粋さを保ちつつ、夫であるキリストの勝利の再臨に供えている様子を描いているのです。結婚においてただ一人のパートナーと性的関係を保つという忠実さは、唯一の神だけを礼拝したいという私たちの願いを描いているものです。罪人のためにささげられたキリストの犠牲的な死を尊重するために、私たちができる最低限の行いが、このキリストへの忠実さなのです。クリスチャンの結婚生活が長く続く秘訣は、その関係が親密な愛と信頼に基づいていることです。結婚において神がもう一人のパートナーになるべきです。そして、夫も妻もキリストに従い、お互いは忠実な犠牲的愛の中で仕え合うべきです。

86. 結婚する前に性的に相性が良いか確かめるため、セックスを試みるべきではないのではありませんか？

この論理は、親が子供に「熱というものがどんなに熱いか分かるには燃えているストーブに触らなければならないよ」と言っているのに似ています。

結婚においてパートナー同士が互いに愛と信頼を育むためには、結婚における性的親密さを保つという契約をしっかりと守ることが不可欠です。結婚前にセックスを控えることにより、各パートナーは自制のためにキリストに依り頼んでいることを実証し、将来の結婚契約の中でのパートナー同士の信頼を高めます。そして、お互いへの健全な尊敬の心を育みます。

結婚前に性的関係を持つことは不品行とかみだらな行いと呼ばれ、聖書はこのような行いを固く禁じています。マタイ 15 章 18 - 19

節を参照してください。私たちの周りの文化は、誰もがそれをしているので大丈夫だよと私たちに告げようとしています。でも、実際はかなりの数の人々がまだ結婚における貞節さを忠実に守り、彼らはその結果築かれる信頼により、強く、忠実で愛情に満ちた関係を生涯にわたって楽しむことができているのです。

87. 不自然な性関係とは何ですか？

不自然なセックスとは、本来その目的で創造されたのではない体の臓器を使用する性交です。獣姦、つまり、動物とのセックスはこのタイプの典型的な例です。ローマ1章18節から32節には、さらに人間が行っている多くの不自然な性行為がリストされていますが、これらは悪です。使徒パウロは私たちの体の部分はすべて大切なものであり、敬意をもって扱うべきであると言っています。

「神様は、私たちの体をそのように造られたのではありません。体を形成するために多くの部分を造り、配置されました。もし単一の器官でできていたら、体はどんなものになっていたでしょう。すから、神様は多くの器官を造られましたが、体は一つなのです。目が手に、『私には、あなたなんか必要じゃない』などとは決して言えません。また、頭が足に、『あなたなんかいらぬ』とも言えません。それどころか、弱く、不要と思われる部分が、実は最も必要なものです。また私たちは、重要でないと思える部分を特に喜ぶのです。そして、人目にさらすべきでない部分は、人に見られないよう注意深く守ります。一方、見られてもよい部分は、特別な注意を要しません。そのように神様は、あまり重要視されない部分が特別に重んじられ、注意深く扱われるように、体を組み立ててくださったのです。それは各部分が活かされ、互いにいたわり合うためです。もし一つの部分が苦しむなら、すべての部分が共に苦しみます。そして、一つの部分が重んじられれば、すべての部分が喜ぶのです。」（第1コリント12章18-26節）

私たちの体のすべての器官は大切に、そして、敬意をもって用いられるべきです。

88. そもそも人はなぜ結婚するのですか？

結婚は尊ばれるべきものです（ヘブル13章4節）。人はその父と母を離れ、妻に結ばれ、別の家族を作ります。やがて、家族は子供をもうけ、乳幼児期から祖父母に至るまでの人生のあらゆる段階の喜びを育みます。

結婚は人間社会における献身的な関係の重要な基盤であり、子供の養育のために安全な場を提供します。結婚は神に敬意を表すものです。私たちはキリストの花嫁なのです（ヨハネ黙示録21章9節）。

89. イエスは結婚と離婚についてどんなことを教えましたか？

イエスはマタイ 5 章 31-32 節で次のように言いました。「あなたがたの教えでは、『離縁状を手渡すだけで、妻を離縁できる』とあります。しかし、わたしは言いましょ。だれでも、不倫以外の理由で妻を離縁するなら、その女性が再婚した場合、彼女にも、彼女と結婚する相手にも姦淫の罪を犯させることになるのです。」

また、マタイ 19 章 3-12 節でも次のように言っています。「イエスを試み、陥れようと、何人かのパリサイ人がやって来ました。そして、『あなたは離婚をお認めになりますか』と尋ねました。

(イエス) 『聖書を読んだことがないのですか。聖書には、神が初めに男と女を造られたので、人は両親から離れて永遠に妻と結ばれ、二人の者は一体となる、と書いてあるではないですか。彼らはもう二人ではなく、一人なのです。ですから、神が結び合わせたものを、だれも離すことはできません。』

(パリサイ人) 『でも、モーセは、離縁状を渡しさえすれば、妻と別れてもよいと言いました。』なおも食い下がる彼らに、イエスは答えて言われました。『モーセがそう言ったのは、あなたがたの心が強情なのを知っていたからです。しかしそれは、神がもともと望んでおられたことではありません。言っておきますが、不倫以外の理由で妻を離縁し、ほかの女性と結婚する者は、姦淫の罪を犯すのです。』

『それなら、結婚しないほうがましです。』弟子たちがイエスに言いました。

(イエス) 『そうは言っても、それは、だれにでもできることではありません。ただ、それを許された者だけができるのです。結婚しないように生まれついた人もいますし、人の手で結婚できないようにされた人もいます。またある人は、天国のために、自分から進んで独身を通します。わたしの言ったことを受け入れることのできる人は、受け入れなさい。』」

イエスの教えと宣教は、人々の心の状態についてイエスがどう思っておられるかという観点から解釈しなければなりません。謙遜な心を持つ人だけが神の国に入ることができるのです。それと同じように、結婚生活におけるお互いの態度も私たちの心の状態を図る良いバロメーターになります。謙遜さは摩擦を解消し、ゆるしを与え、離婚を避けるるように私たちを導きます。

ヨハネ 4 章 1-30 節には、夫が 5 人いたサマリア人の女性に赦しを与えたイエスの物語があります。彼女は夫ではない別の男と住んでいました。イエスの愛と赦しをもたらす恵みを知って彼女の人生は変わりました。福音は、喜んで罪を悔い改めようとするすべての人にとって良い知らせなのです。

90. 人工妊娠中絶をしても良いのでしょうか？

殺人を犯しても大丈夫ですか？ 出エジプト 20 章 13 節には、「人を殺してはならない」とあります。もし、あなたが胎児の時に中絶

されたなら、あなたはこの本を読んでいないでしょう。人間の命は受胎から始まります。

イエスを妊娠したマリヤが訪ねてきたとき、胎児だった洗礼者ヨハネは母親エリザベスの胎内で生きていて、跳びはねてマリアの訪問を喜びました（ルカ 1 章 39-45 節）。その生命を破壊することは殺人を犯すことです。胎内に宿ったそれぞれの生命は、被造物のあがないに関する神の計画を実行する可能性を持った人々です。神は命を授けたり、終わらせたりする権利を持つ唯一のお方です。医療専門家は、ある生命を救うために他の生命を犠牲にしなければならないという非常に困難なジレンマに直面することがあります。これは非常に深刻な決断であり、医療関係者は命を救うための訓練を受けているため、この責任を非常に真剣に受け止めています。どんな医療従事者も命を奪いたくないでしょう。別の命を救う以外の目的で他の生命を終わらせるのは医療専門職の倫理に反しているのです。

P. 未だに理解できないことがあります、どう対処すればよいのでしょうか？

91. 自分に未だ理解できないことがあるとしたら、どうしたらいいのでしょうか？

この世には私たちが決して理解できないことがあります。しかし、神は私たちが神の恵みと知識の中で成長する中で、そのクリスチャン生活が継続的でエキサイティングな学習プロセスになるようにと意図しておられます（第 2 ペテロ 1 章 1-10 節）。

神はあなたが既に得た知識についてテストし、あなたの持っている知識を経験と混ぜ合わせ、あなたが正しいことと間違っていることを区別できるようにしてくださいます。聖書はあらゆる点であなたのガイドブックであり、み言葉はあなたを強く、成熟したクリスチャンにすることを覚えておきましょう（イザヤ 2 章 3 節）。

あなたに理解できないことがあったら、それを祈りの中で神に伝え、神の助けと悟りを求めることを忘れないでください。

「心を動揺させないで、ただ主キリストを信じなさい。もしだれかに、「なぜキリストを信じるのか」と尋ねられたら、いつでもその理由を話せるようにしておきなさい。」（第 1 ペテロ 3 章 14-15 節）。

Q. クリスチャンの素晴らしい目標

92. クリスチャンの目標とはどんなものですか？

クリスチャンの目標は、キリストが私たちの内に居られ、栄光の希望となられることです。というのは、私たちの神は私たち一人一人に知恵と啓示の霊を与え、私たちの召された希望というものが何であるのか悟り、知るようにと願っておられるからです。つまり、神

は私たちを召して、キリストと共同の相続人にしてくださいろうとしておられるのです。

神は私たち一人一人が主の御霊によって栄光から栄光へと変えられて、キリストのイメージに形作られるようにと願っておられます。

ですから、私たちの内に居られるキリスト・イエスに似たものとなり、神により上に召していただくという目標を目指して進んでいきましょう。（エペソ 1 章 18 節、4 章 4 節、第 2 コリント 3 章 18 節、ピリピ 3 章 14 節、コロサイ 1 章 27 節）。

索引（50音順）

	質問番号	神の言葉	1,19,79-83
愛	5	神を知る	
証し	6, 14, 42, 46, 47, 49, 56, 60, 61, 62, 70	帰属意識	16,60, 54
悪魔	6,14, 26,58,59,61,84	喫煙	27
与える	11,24	教会	2,20,23
アルコール	26	教派	21
安息日	25	キリストの体	20,23
イエス・キリスト	2- 5,11,13,14,19,20,21,29,61,62,63	悔い改め	13
イスラム教徒	70	偶像	58,72
偉大な人物	21,71	偶像崇拜	58,72
祈り	11,16,17 18,62, 68,69	クリスチャン	10,11,22-24
受け入れる	7	クリスチャン人生	11,32
うつ	31	結婚	85,86,88,89
占い	84	権威	51
永遠の命	2,6	娯楽	28
栄光	62,74	再臨	21,78
エスニック	54	捧げもの	24
親	6	さばき	75
カウンセラー	62	賛美	10,11,62
確信	5,62	三位一体	63
神	57-63	死	74
神々	8,58	死海の巻物	79-81
神の国	20, 43-48	指導者	62
		市民	20

宗教	8, 71-73	洗礼	12,13,14
十分の一	24	創造	1,2,3,57,59,60
将来の出来事	62,77,84	祖先	73
勝利	14,62	大患難時代	76
食物	72	態度	11
神格	62,63	タバコ	27
人格 43, 62, 63	11, 41,	長老	44
人工妊娠中絶	41, 90	罪	2,3,9,17,19,62
信仰	1,9,16,	罪の結果	4
30,33,38, 60		弟子	40
信者	14,15 ,23,62	天国	74,78
信じる	5	日曜日	25
信頼	5	人間	2,4,57
救い	5,6,22	反逆	78
聖化	5,32	反抗、不従順	4,
聖餐	11	8,17	
誠実	42	ヒンズー教徒	70
聖書を読む	11,19,23,63,71,79- 83	復活	5, 13
政府	50	仏教徒	70
聖霊	10,12,14,15,18, 21,27,62,63,82	不品行	86
聖霊のバプテスマ	11,14,15	不服従	4,8,17
セックス	85,86,87	文化	54
切望	21	法律	50
先祖礼拝	73	翻訳	83
		間違い	29

幻、ビジョン 77

道をそれる 30

民主主義 53

民族 55

目的 21

薬物 26

友人 10

誘惑 4,16

ユニタリアン主義 63

赦し、ゆるし 9

預言赦し、ゆるし 77,79

落胆 31

離婚 89

良心 60,72

礼拝 20,22,58,77

レクリエーション 28

人の必要性：箴言 20 章 9 節「『心を入れ替えたから、もう潔白だ』と、だれが言えるでしょう。」

ローマ 3 章 23 節「すべての人は罪を犯したので、神の標準にはほど遠い存在です。」

ローマ 6 章 23 節「罪の支払う報酬は死です。しかし、神が下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスによる永遠のいのちです。」

キリスト-答え：コロサイ人 1 章 14 節「この神の子は、ご自分の血という代価を払って、私たちを買い取ってください、すべての罪を赦してくださったのです。」

ヨハネ 3 章 17 節「神がご自分の御子を世にお遣わしになったのは、世をさばくためではなく、世を救うためです。」

悔い改め：イザヤ 55 章 7 節「悪事を捨て、悪いことをしようとする思いを、きっぱりと捨てなさい。主に立ち返るなら、主はあなたをあわれんでくださいます。私たちの神に帰りなさい。神は赦してくださいます。」

使徒 2 章 38 節「罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマ（洗礼）を受けなさい。そうすれば、聖霊という賜物をいただけます。」

告白する：1 ヨハネ 1 章 9 節「もし自らの罪を神に告白するなら、神は真実な方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」

信じる：ローマ 10 章 9-10 節「もし自分の口で、『イエス・キリストは私の主です』と告白し、自分の心で、『神はイエス・キリストを死者の中から復活させてくださった』と信じるなら、あなたは救われるのです。人は、心で信じることによって、神の前に正しい者とされ、その信仰を口で告白することによって救われるのです。」

祈る：ヨハネ 14 章 13 節「わたしの名によって、父に願い求めなさい。どんなことでもかなえてあげましょう。父が子によってほめたたえられるためです。」

神にあなたを許し、あなたを清め、聖霊によってあなたの人生に力を与えてくださるように頼んでください。

受け入れる：ヨハネ 1 章 12 節「受け入れた人はみな、この方（イエス・キリスト）から神の子どもとなる特権をいただきました。」

ヨハネ 8 章 36 節「神の子が自由にしておいたら、それでほんとうに自由の身になるのです。」

従う：ヨハネ 15 章 9-15 節「父がわたしを愛してくださったように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛のうちに生きなさい。わたしの戒めを守るなら、わたしの愛のうちに生き続けます。わたしが父の戒めを守り、父の愛のうちに生きているのと同じ

です。このことを話したのは、わたしのうちにあふれる喜びを共に味わいたいからです。

わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。これがわたしの教えです。愛は何によって測ることができるでしょう。友のためにいのちを投げ出すこと、これより大きな愛はありません。わたしの命令に従う人は、わたしの友です。あなたがたはもう使用人ではありません。今からは、わたしの友です。主人は使用人に秘密を打ち明けたりはしません。しかし、わたしは父から聞いたことをみな、あなたがたに話しました。」

メモ：「異なる民族的背景を持つ多くの人々がキリストを信じるようになるのは素晴らしいことです。しかし、新しくクリスチャンになった人々は多くの点で聖書と異なる見解を持っておられ、そのような理解に基づく質問に対する答えも求められています。

この小冊子を通して、ブライアンはこのような必要性に取り組んできました。しかし、人々が自分のこころの言葉（母国語）でこれらの答えを持てば、聖書の理解はより確実なものとなります。この小冊子は多民族世界で生きる私たちにとって優れた参考書となることでしょう。」

ウォーレン・ペイン

OMF 国際宣教師として日本へ（1974年～2000年）

OMF NZ ナショナルディレクター（2002年～2008年）

クリスチャンのためのポケット教理入門！

Q & A で分からない教理が簡単に理解できる

伝道や弟子訓練にも活用できるスグレモノ！

神 丈二

アジアのクリスチャンたちから数千もの疑問を収集して書き上げられたこの小冊子は、日本人クリスチャンの抱える疑問にも痒いところに手が届くように答えてくれるでしょう。著者の長年にわたる宣教師として経験と研究の成果が凝縮されたライフワーク。

土居 昭

オークランド日本人教会長老

ISM ニュージーランド 日本人スペシャリスト